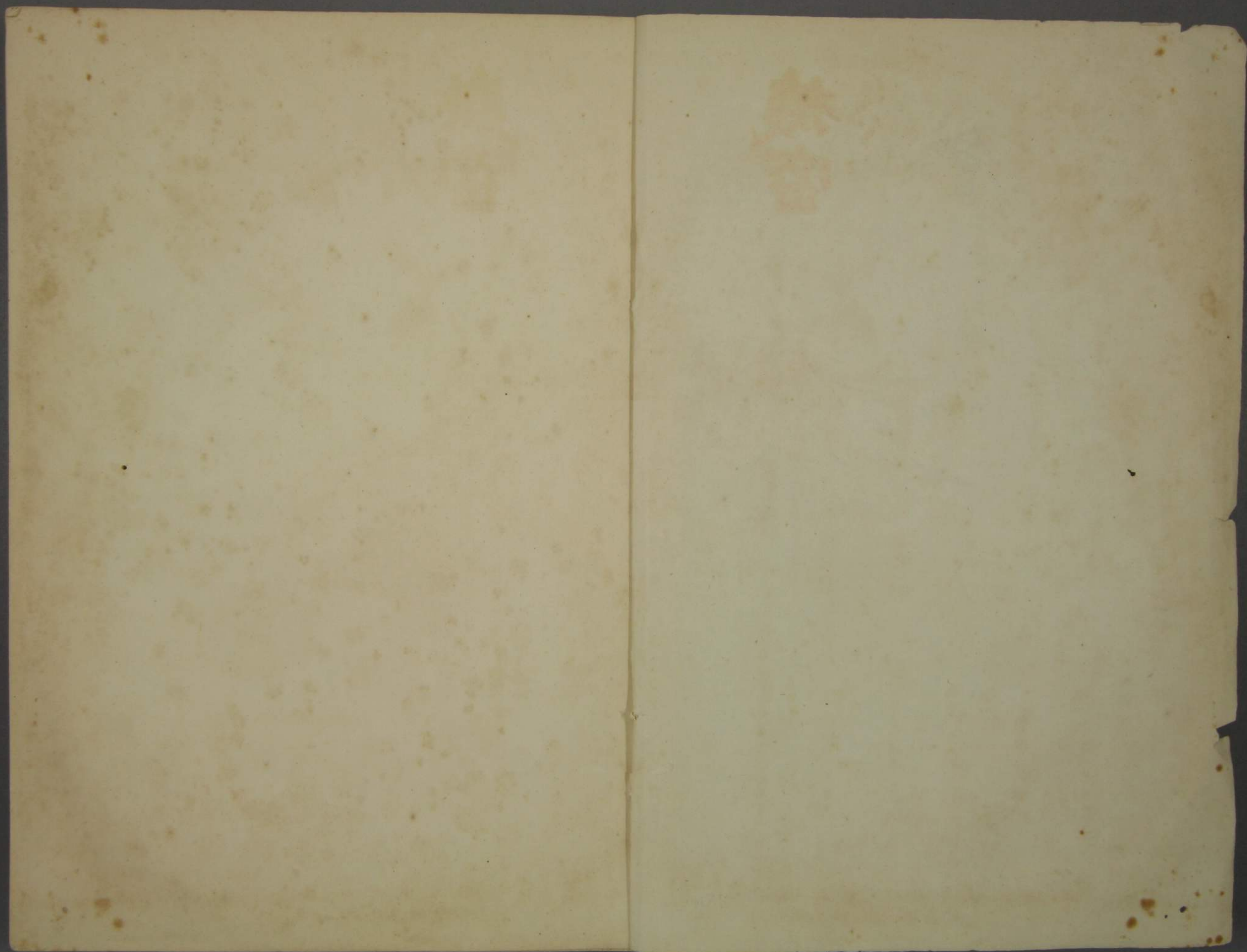


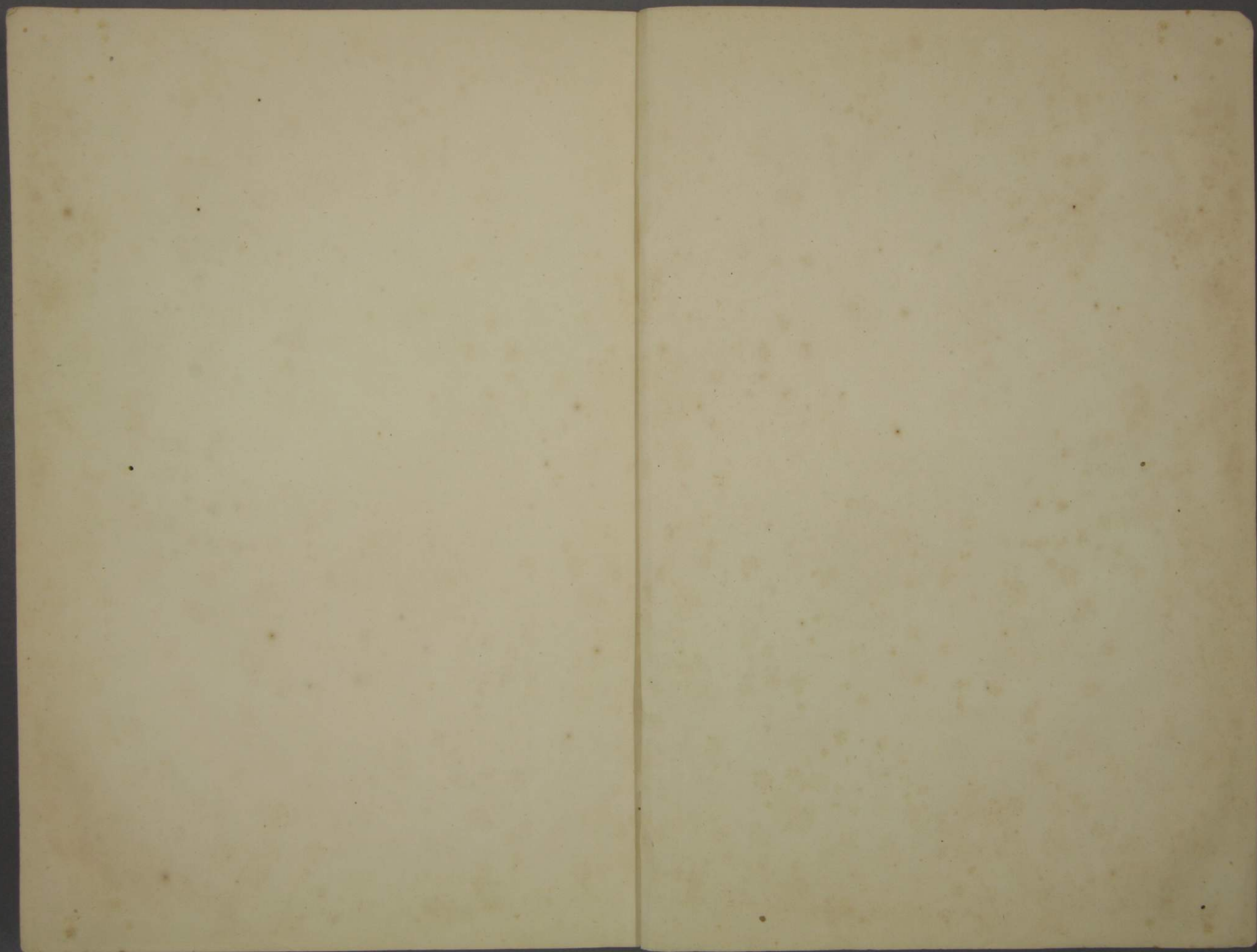
會計答議一

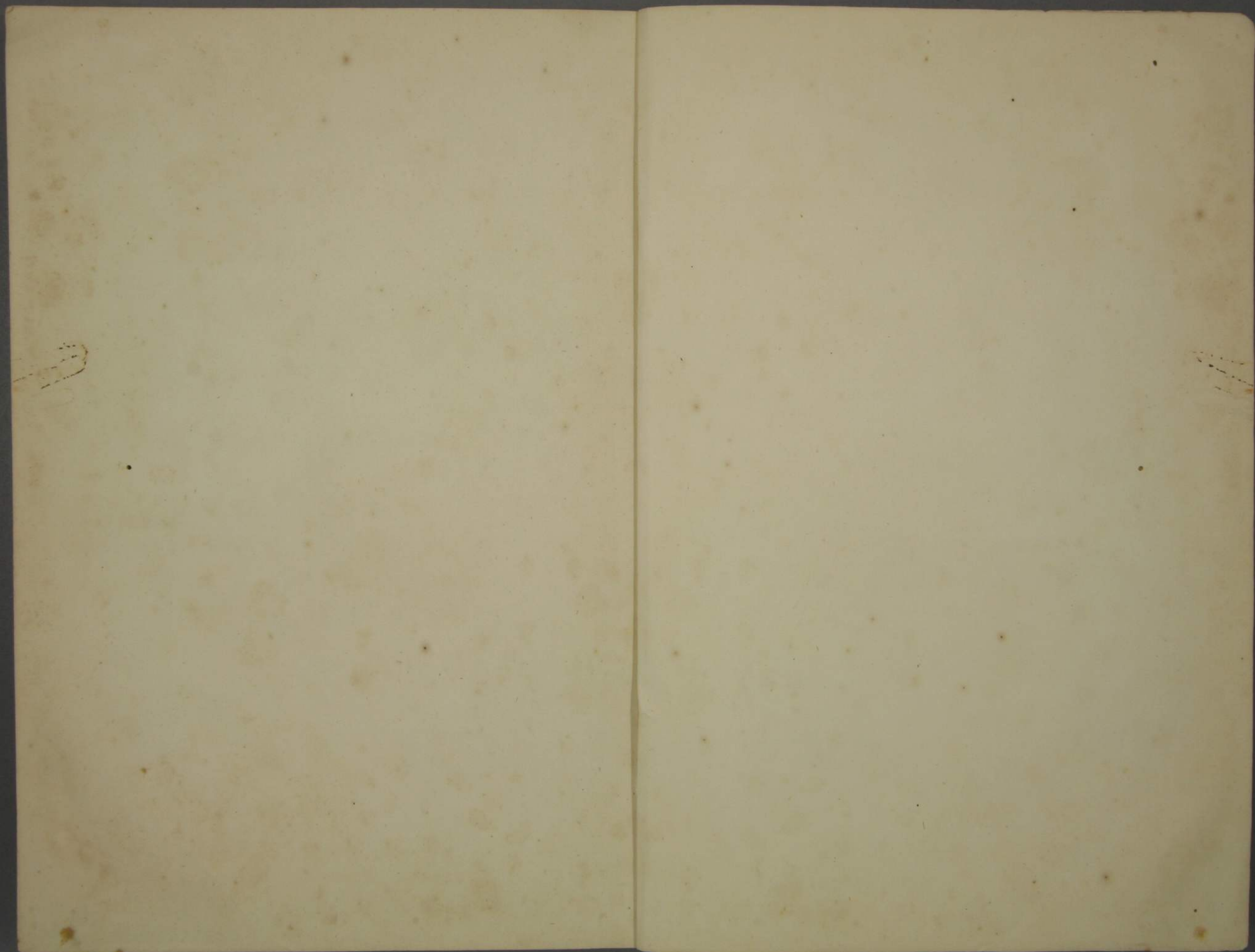
機密

280











係此尚吞目次

議院ノ豫美ヲ議スルノ權ニ付理論ト實際行政ノ便益トヲ調和セシムルノ方法如何

二、豫美ノ全部中ニ議院ノ議ヲ要セサルノ部分ヲ包含シタルハ豫美ノ議權ニ矛盾セサル乎ノ問

三、政府ノ法律上ノ義務ニ原ク支出及天皇ノ憲法上ノ權利ニ依テ定ムル支出トハ如何

大正十一年四月  
隈侯爵寄贈

- 四. 會計検査院ノ職權
- 五. 報告ノ當否(即手教科)
- 六. 議院ニ於テ必要ノ費目ヲ過度ニ造減少  
シタル時ノ處分如何
- 七. 豫美科目區分ノ件 ロエスレル  
モスセ 西氏
- 八. 配分税ノ件
- 九. 固定資本ニ付官吏ノ俸給ニ係ル件
- 十. 豫美ノ議權ハ立憲上ノ要素ナルヲ以テ  
各種ノ制限法ノ外ニ他ニ包合的ノ作用  
アル一キノ尙

問

租税ハ代議會ノ自由ナル承諾ヲ經スシテ徵收  
セラル、トナカルヘシ從テ代議會ハ豫美ヲ議  
定スル全權アリ、ノ理論一タヒ英國ノ大憲及  
佛國ノ革命憲法ノ第一義トナリシヨリ其勢ハ  
歐洲各國ニ蔓延シ一時ノ銳鋒ハ筆ヲ一カテサ  
ルノカヲ以テ政治社會ヲ支配シタリ乃チ學問  
ノ如キモ其憲法ノ九十九條ハ實ニ此ノ理論ノ  
影寫ナラサルハナシ

然ルニ其ヲ實際ニ徵驗スルニ及テ國ノ公益ヲ

保護スルノ必要ニ於テ往々理論ト相背馳スル  
コトアリ蓋シ國家ハ生活的ノ事物ナルヲ以テ  
内外ノ事状ハ或ハ豫想前見セサル所ノ變態ヲ  
生シ從テ豫美外ノ支費ヲ要スルノ場合アルノ  
ミナラス又平年ニ於テモ精確ナル豫美ハ實費  
見積ノ外ニ餘地ヲ存セサルヲ以テ時價ノ高低  
財利ノ變動ニ因リ意外ノ不足ヲ生スルコト無  
シトセズ然ルニ必豫美ノ限界ヲ確守シテ堅密  
ニ其節目ヲ履踐セントスルトキハ安レカ爲ニ  
行政ノ便宜ト活潑ヲ失ヒ實際ニ國民ノ不幸ヲ

ナスコト少小ニ非サル一キナリ  
猶其ノ外ニ政府ト議院ト和齟セサルトキハ議  
院ハ政府ノ必要ナル歳費ニ充ツ一キ税入ヲ否  
決シテ故意ニ政府ノ行政ヲ困難渋滞ナラシメ  
以テ内閣ノ更迭ヲ促サントスルコト往々歴史  
上ニ見ル所ナリ故ニ英國大憲及其第十世紀ノ  
租稅叢權ノ憲法ノ主義ニ從フトキハ到底議院  
改革ノ傾向ニ墜テサルヘカラス  
近來ニ至リ憲法ノ研究益々精密ヲ窮ムルトモ  
歐洲各國ノ富強競争ノ必要トニ由リ兵權ノ加

ク稅權モ亦議院ノ全權ニ委ヌヘカラサルコト  
ヲ發見シタルカ如シ然ルニ稅權ヲ政府ノ手中  
ニ存スル爲ノ方法ハ試ニ之ヲ廢棄スルニ左ノ  
七個ニ外ナラス

(甲)立法ノ權ハ上院代議院ト政府トノ三局ニ  
於テ之ヲ平等ニ掌有スル者トシ若シ其一局  
ニ於テ叶儀セサルトキハ豫美未決ノ者ト看  
做シ政府ノ原案ヲ施行ス(即チ千八百六十三  
年一月二十七日ビスマルク氏ノ議院ニ於テ  
ル演說)

(乙)憲法制定前ノ稅法ハ旧額ニ依テ徵收シ更  
ニ歳費ノ増減ニ拘ラス故ニ議院ハ租稅ノ大  
部分ニ於テハ容喙ノ權ナシ(普憲法百九條)  
(丙)一タヒ議院ニシタル必要費ハ更ニ之ヲ變更  
スル途ハ例ニ依テ支出及徵收ニ年ニ議決ヲ  
經ス以テ永久ニ變動ナカラシム(英ノ「ホニ」  
ニソリド又佛ノ有名ナル宰相子ツケル氏  
ノ演說)及少クトモ數年ヲ期シテ一定ノ議決  
ヲ取リ其年期間ニ變動ナカラシム(獨逸帝國  
ノ軍費并和蘭ノ經常費ヲ十年一定トシタル



コト)

(丁)年々ノ定額ノ外ニ別ニ非常ノ用意ノ為ニ  
國債金庫ニ儲金ヲ設ク瑞典憲六十三條)

(戊)定額各科ノ外ニ議院ノ承諾ヲ經テ豫備費  
ヲ設ケ非常ノ需要ニ充ツ

(己)實費定額ヲ超過シ及定額ノ科目ノ外ニ新  
ニ生シタル費用ハ翌年ノ議會ニ於テ之ヲ報  
告ニ議院ノ承諾ヲ要スルノ條ヲ設ク普百四  
條)

(辛)議院ニ豫美案ヲ議決セシムルハ其大綱ニ

止マリ細目ニ及ハシメス以テ實際ニ於テ各  
項ノ間ニ流用ノ便ヲ存ス(佛ノ拿破侖時  
ニ各省コトニ議決セシメ又各省ノ間ノ流用  
ハ勅令ヲ以テ許スヘキコトヲ憲法ニ擧ケタ  
リ)

右ノ七個ノ方法ノ一モ多少ノ辨解ヲ費サスニ  
テ理論ノ満足ヲ予フヘキモノナシ蓋現世紀ニ  
於テハ學問上憲法ノ標準未ダ一定ノ歸着ヲ得  
ルノ時期ニ達セス故ニ政事實施ノ上ニ於テ性  
々兩方矛盾ヲ生スルコトヲ免ルシクシテ或ル國

ニ於テハ政府ノ威力全盛ナルカ爲ニ政界上ニ  
於テ十分ニ運轉制御スルヲ得ルモ他ノ國ニ  
於テハ往々安ニ由テ變革ノ原因ヲナスコトヲ  
免レズ安ノ事ニ付キ理論ト實際ト調和スル爲  
ノ新業ハナキヤ又所陳七個ノ方法ノ中何レカ  
擇ニテ取ル一キヤ貴下ノ意見ヲ示サレニコト  
ヲ望ム

政府ニ必要ナル費用ヲ安全ナラシムル爲以上  
掲ケタル各種ノ手段ハ悉ク誤解ノ主義ヨリ出  
ル所ノ結果ヲ僅ニ減削スルニ過キサレ窮策ナ  
リ其誤解ノ主義トハ國會ハ國君ニ對シ政府ノ  
費要ヲ隨意ニ許否スルヲ得ルト云フ立憲ノ  
論理是ナリ安ノ自由ナル國會ノ許否權ハ往古  
ヨリ傳來セルモノニシテ古ハ國家ノ財務ハ現  
今トハ全ク異ナル主義即チ官有地及特有權ニ  
基ケルモノナリ當時ニ在リハ通常政府ノ收入

支出ハ其所有物ヲ以テ之ニ充テ更ニ國會承諾  
ヲ要セサリシモ租税ハ實ニ非常ノ補助物ニシ  
テ國民ハ之ニ關スル法律上ノ義務ヲ有セサリ  
シカ故ニ之ヲ其隨意ニ任セタリシナリ然レモ  
必要ナル收入支出ハ政府ノ利益ノ爲欠クヘカ  
ラサルカ故ニ人民ノ隨意ニ任スト云フハ一ノ  
學理上ノ言タルニ過キサリシト蓋亦必要ナル  
租税モ尙實際之ヲ拒ミシコトナシトセズ即チ  
英國ニ在テ屢々女手段ヲ實行シ漸クニ議院政  
事ノ基礎ヲ鞏クシタリ又古獨逸帝國ニ於テハ

其家末ノ三百年間國會ハ其政府ニ對シ必要ナ  
ル金錢及兵隊ヲ拒絕シタルカ爲帝國ノ權力ハ  
殆ント地ニ墜テ實力ハ却テ各邦ニ歸スルニ至  
リシナリ  
近世ノ國家ニ於テハ其財政ハ專テ特有權ニ基  
カスニテ租税ニ基テリ政府ハ租税ニ關シ官有  
地ニ於テル如ク所有權ヲ有スルヲ得スト蓋其  
必要トスル費途ニ關シ法律上ノ請求權ヲ有ス  
ルヲ得ヘシ如何ニシテ其請求權ヲ得ヘキヤニ  
至テハ蓋會計豫美ハ即チ法律ナルカ故ニ議院

ノ承諾ヲ得ルニ非ザルハ効力ヲ有セスト云ハ  
ル議院争論ノ説ヲ排棄スルコト又會計預美ニ  
於テハ議院ノ參與ヲ以テ自由ナル承諾權ト解  
釋セザルコト是ナリ夫レ會計豫美ハ一モ善  
通ノ規準ヲ有セザルカ故ニ固ヨリ法律ニ非ス  
却テ或ル收入支出ノ全權ヲ與フルモノナリ安  
全權ハ隨意ニ之ヲ付與シ又ハ之ヲ拒否シ得ハ  
キモノニ非ス何トナシハ若シ之ヲ拒否スルト  
キハ政府ノ運動ヲ阻任シ國家ノ命脈ヲ危クス  
ルニ至レハナリ故ニ會計豫美ニ於テハ承諾ノ

權アルノ理ナシ但或ル支出ヲナスヲ至当ナリ  
トスルカ如キ各個費目ニ關スル便宜上ノ向題  
ニ止フルノニ便宜ノ向題ハ管理上ノ向題ナル  
カ故ニ行政權ノ區域ニ属スルモノナリ若シ安  
ノ向題ニ關シ議院ニ勢力ヲ與フルヲ以テ已ム  
ヘカラストセハ單ニ豫美ハ法律ニ準據シタリ  
ヤ否ヤヲ審査スルノ參與權ヲ以テスヘク無限  
ノ承諾又ハ拒否ノ權ヲ與ヘ安ニ依テ國君ノ憲  
法上ノ權利ヲ減絶スルヲ得サラシムヘキナリ  
是レ英國ニ於テモ亦實際認許セラレ、所ニシ

テ議院ノ多数ハ嘗テ宰相ニ對シ許否權ヲ實用  
シタリシコトナキカ故ニ安權ハ實ニ有名無実  
ノ物タリ獨逸國ニ於テ自由ナル議院ノ承諾權  
ハ是認セサル所ナリ巴威爾<sup>(ベオツル)</sup>氏國法論  
二百二十一條ニ於テハ議院ハ便宜ノ支出ヲ許  
否スルヲ得ルモ必要ノ支出ヲ許否スルヲ得  
カラス徒テ議院ハ必要ノ支出ニ充ツル租稅ヲ  
承諾スルノ義務アリト云フノ原則ヲ行ヘリ  
普爾<sup>(リオン)</sup>子氏國法論第一卷第百十六條ニ於  
テモ巴威爾ト同一ノ原則。行ハレ現行ノ法律

ニ基ク收入及政府ノ法律上ノ義務ニ基ク支出  
拒否スルヲ得ス何トナレハ下院ハ憲法ヲ遵守  
シ且其議稅權ヲ執行スルノ際亦法律ヲ遵奉ス  
ヘケレハナリ故ニ自由ナル承諾權ハ常ニ便宜  
ノ支出新收入及現收入ノ變更ニ關シテノニ存  
スルモノトス但シ末夕兵ニ由テ實際ノ爭議ヲ  
一掃スルコト能ハス蓋新收入ヲ興スニ當テ其  
支出ハ便宜ノモノナルヤ或ハ必要ノモノナル  
ヤヲ區別スルニ關シテ毎ニ一ノ筆議ヲ免レス  
而シテ從來確定ノ收入支出ハ異議ナク承諾セ

ラル、ヲ例トス

安ニ據レハ正當ナル普通確定ノ原則ヲ掲クル  
ト必要ナリ即チ予ハ左ノ原則ヲ提出セシト欲  
ス

政府ノ一切ノ收入支出ハ毎年豫定シテ會計  
豫美ヲ製シ政府ハ之ヲ議院ニ呈出シ其承諾  
ヲ經テ確定ス

現行ノ法律又ハ其他ノ權利上ノ名義ニ基ツ  
キタル徵收及現行ノ法律又ハ政府ノ法律上  
ノ義務ニ基ク支出又ハ皇帝ノ憲法上ノ權利

ニ據ル所ノ支出及之ニ充ツル為必要ナル費  
目之ヲ拒ムトヲ得ス

會計豫美ノ確定ニ関シ叶議調ハサルトキハ  
内閣ノ責任ヲ以テ之ヲ裁決ス

安原則ヲ説明セシカ為予ハ左ニ鄙見ヲ陳ヘシ  
ト欲ス

第一會計豫美ハ毎年其全部ヲ確定スヘシ是レ  
簡單ニシテ便宜ナル方法ナリ何トナレハ將來  
ニ向テ束縛ヲ受ケサレハナリ故ニ數年、涉ル  
會計豫美ハ予ハ之ヲ贊成セズ是レ間接ニ議院

ノ承諾權ヲ制限セニカ爲ニ設ケタルモノニ過  
キサルナリ又收入ヲ永久ト臨時トニ分テ或ハ  
通常ト非常トニ分ツモ亦其宜キニ非ス蓋臨時  
ノ收入モ變更シテ永久トナルアリ永久ノ收入支  
出タリトモ毎年審査スルヲ正當トスレハナリ  
如斯區別ヲナシタルハ畢竟議院ノ議稅權ヲ許  
與シタルカ爲ノ故ニ外ナラス又英國ノ「ホニフ  
ニソリ」ドト並亦一定不變ノモノニ非スシテ  
時ニ變更ヲ受クルモノナリ按制度ノ本旨ハ或  
ル收入支出ヲシテ毎年國會ノ承諾ニ依テ左右

セシメサテシムルカ爲ナリ按制度ヲシテ果シ  
テ立憲ニ振カサル者トセハ何故ニ毎年覆議ス  
ル所ノ必要ナル其他ノ支出ヲ毎年承諾スルヲ  
要スル手段ニ由テ之ヲ觀レハ毎年ナス所ノ自  
由ナル承諾ハ事ノ自然ニ出ルニ非スシテ議院  
政事ニ附着シタル固有ノ制度ニ外ナラス  
第一一般ノ立法權ト同一ナル獨立ノ議稅權即  
承諾權ハ是恐スヘカラサル者ナリ會計豫美ハ  
法律ニ非ス行政權ニ屬スルモノナリ而シテ其  
大部ハ現行ノ稅法及其餘ノ法律ヲ執行スル

ノ用ヲナス且財政ヲ整頓明瞭ニシ殊ニ收入ト  
支出ノ平均ヲ保ツカ爲ニ製スルモノナリ然レ  
國會ニ承諾ノ權ヲ予フル所以ハ沿習ノ立憲主  
義ニ戻ラス且會計豫美ニ関スル責任及監督ノ  
一部ヲ國會ニ任セシカ爲ナリ但安承諾權ヲ制  
限シテ現行ノ法律及國君ノ憲法上ノ權利ヲ妨  
害セシメサテシムヘキノニ故ニ國會ノ議稅權  
ハ一層下等ノ權トシテ現行ノ法律及國君ノ憲  
法上ノ行政權ニ從屬セシムヘク語ヲ更ヘテ之  
ヲ言ハハ議稅權ハ法律ヲ監視セズ現行ノ憲法

ヲ顛覆スル爲ニ濫用セサル程度ニ於テ之ヲ予  
フヘキナリ以上論スル所ノ点ヨリ生スル結果  
左ノ如シ

甲現行ノ稅法(地租法等)ニ從フト政府ノ其  
他ノ權利ニ依ルトテ向ハス法律上政府ニ屬  
スル收入例ハ政府ノ所有財産手数料郵便  
鐵道等ヨリ生スル收入ヲ継続シテ徵收スル  
ニハ毎年更ニ承諾ヲ受クルヲ要セズ其原則  
ハ普國ニ行ハルト並英國ニ於テハ然ラス  
巴威爾ニ於テハ唯其一部ノニ行ハル如斯承



法ハ法律上理由アルモノニ非ス何トナシハ  
其收税法及政府ノ其他ノ權利ハ既ニ存立ス  
ルヲ以テ毎年其法律上ノ効力ニ関シ更ニ疑  
向ヲ起スコトヲ得サレハナリ故ニ國會ノ承  
諾ヲ要スルモノハ未タ政府ノ有ニ歸セサル  
新收入ヲ興ス場合ニ限ルト雖唯丙ニ掲クル  
制限アルノミ

乙. 支出ニ関シ獨逸國ニ於テハ政府ノ法律上  
ノ義務ニ基ク支出ニ限り拒否スヘカラサル  
ヲ例トス例ハ一、國債ノ利子官吏俸給契約又

ハ法律ヨリ生スル義務ノ如キ是ナリホニ  
ニソリト上ノ制度アルカ為法分カ制限セラ  
レタルニモセヨ英國ノ如キ拒否權ハ獨逸國  
ニハ見サル所ナリ蓋國若ノ憲法上ノ行政權  
モ亦均ク遵奉セラレヘキ權利上ノ名義ナリ  
其行政權ヲ執行スルカ為ニ必要ナル費目ヲ  
隨意ニ拒否セラレ、ニ依リ妨害ヲ被リ之ヲ  
中止スルニ於テハ大權ハ遂ニ実力ナキニ至  
ルヘシ法律ヲ司ル行政權ヲ行フ國若ノ權理  
中ニハ必ス之カ為ニ必要ナル支出ヲナスノ

権ヲ含有セサルヘカラス故ニ安司権執行権  
ノ及フ限リハ支出ノ権モ亦從テ存スルヲ以  
テ原則トス獨逸國ニ於テ必要ナル支出ハ常  
ニ承認セサルヘカラスミテ獨便宜ノ支出ヲ  
拒否スルヲ得ルヲ例トスルノ主義ハテリハ  
ニド氏ノ如キ有者ナル又對論者アルヲ以テ  
モ其不完全ナルヲ見ルヘシ何トナレハ必要  
ト便宜トノ分鮮ハ紛錯定ラサルカ故ニ到底  
政府ト議院トノ間ニ起ル爭論ヲ免ルヘカラ  
サレハナリ予ノ見ル所ニ據レハ承諾ヲ拒ム

コトヲ得ル支出ハ九ツ政府ニ權利ナキ支出  
即チ現行ノ法律又ハ命令ニ抵觸スルモノ或  
ハ皇帝ノ行政權ノ及ハサル目的ニ供スルモ  
ノ例ハ法律命令ヲ超スル俸給ノ如キ又或  
ハ大臣ノ私用ニ供スルモノ或ハ法律上ノ給  
與ヲ超スル軍隊ノ費用ノ如キモノニ限リシ  
兩權利アル支出ニ充ツル為必要ナル費用ハ  
拒否スルヲ得ス現收入ニシテ既ニ其支出ニ  
充ツルヲ得ヘキトキハ議院ノ承諾如何ヲ問  
フヲ要セス然レ比新收入ヲ要スルトキハ其

承諾ヲ受ケサルハカラ大例ハ新税ヲ徴収  
シ又ハ現行ノ租税ヲ増額シ國債ヲ募ルカ如  
キ是ナリ安堪合ニ控テハ如何ナル方法ヲ以  
テ新收入ヲ徴収スヘキヤノ問題トナルヘシ  
而シテ國會ニ承諾ノ權ヲ予ヘサルハカラス  
例ハ政府ハ新税ヲ徴収セシテ致スルモ議  
院ハ現行ノ税ヲ増額セント致スルカ如キ英  
問題ニ對シ政府ト議院トノ叶議調ハサルト  
キハ旧說ニ從ハ之ヲ未決ニ付シ而シテ一  
時前年度ノ會計豫算ノ効力ヲ保タシム或ハ

現行ノ租税ヲ繼續スルノ權ヲ政府ニ予フル  
者トス是レ實ニ不當ノ事ナリト謂フヘシ何  
トナレハ其ニ依テ爭議ノ原因タル問題ヲ氷  
解スルヲ得サルノミナラス又政府ハ憲法背  
反ノ汚名ヲ被リ或ハ其必要ト認メタル支出  
及政事上ノ處置ヲ中止シ之カ為國家ヲ危急  
ニ陥ラシムヘケルハナリ  
予ノ提出シタル意見ニ據レハ如斯爭議ハ內  
閣ノ責任ヲ以テ皇帝ノ取上裁決ヲ仰ク一キ  
モノトス抑々各首ト國會トノ爭議ヲ裁決ス

ルニ明法上主権者ヲ置テ他ニ其権アルコト  
ナシ大臣ノ辞職下院ノ解散ノ如キ他ノ方法  
ハ或ハ主権ヲ侵害スルカ又ハ筆議ヲ延引ス  
ルニ止マレルニ

然レモ皇帝ノ裁決ハ其年度ノ會計豫美ニ對  
シテノミ効力アルノミニシテ數年ニ涉リ効  
力ヲ及ホスモノニ非サルコトニ注意スヘシ  
故ニ國王ノ裁決ハ國會ノ承諾ヲ受ケスニテ  
將來ニ効力ヲ有スル新税法ヲ設クルノ力ナ  
キナリ若シ其力アリトセハ議院ノ立法権ヲ

侵害スルニ至レハナリ人或ハ若シ其力ナシ  
トセハ次年ニ於テ筆議ノ再燃知ルヘカラサ  
ルカ故ニ実行ノ效果如何ヲ疑フ者アラシ然  
レモ君主國ニ於テハ皇帝ノ裁決ハ常ニ絶大  
ノ勢力ヲ有スルモノナレハ其間ニ必虚心熟  
思議論調和スルニ至ルヘシ  
以上ノ論旨ニ據レハ議院ノ議院權ヲ忘ノ事項  
ニ限ルヘシ  
一、現収入ノ豫美上ノ税額ヲ審査シ得ルモ其収  
入ヲ徵収スル政府ノ權ニ容喙スヘカラス例ヘ

ハ政府ハ地稅ヲ四億トスルモ議院ハ四億二千  
万トスヘシトスルカ如キ是ナリ如斯收入ノ計  
美上ノ審査權ハ之ヲ議院ヨリ奪フヘカラス何  
トナレハ安推ヲ與ヘストセハ現收入ヲ監督ス  
ルノ道絶エテ無キニ至レハナリ

二、豫美上ノ支出科目ニ関シ其法律ニ合シ且正  
當ナルヤ又法律命令上ノ額ナリヤ否ヤヲ審査  
スルヲ得ヘシ法律ニ準據スル支出ハ其法律ヲ  
改正スルニアラサレハ之ヲ増額スルヲ得スト  
重純然タル行政權ノ區域内ニハ如斯制限アル

コトナシ例ハ國君ノ年金ヲ法律ヲ以テ定メ  
タル場合ニ於テハ之ヲ増額スルニハ同時ニ其  
法律ヲ改正スルニ非サレハ能ハサルカ如シ  
三、國庫ノ爲新費目ヲ承諾スルヲ得ヘシ例ハ  
新タニ租稅ヲ徵シ現稅ヲ増額スルカ如キ是レ  
ナリ

然レモ如斯三様ノ關係ニ於テ議院ハ無限ノ拒  
否權ヲ有スヘキモノニ非ス若シ叶議調ハサル  
ニ於テハ皇帝ノ裁決ヲ以テ終審トス

以上ノ主義ノ普國ノ制度ニ異ナル要點ヲ挙ク

レハ左ノ如シ

一、按主義ニ於テハ善例ノ如ク自由ナル支出承  
諾權ヲ議院ニ予ヘス

二、會計豫美ハ法律ト同一視セラレサルカ故ニ  
議院ノ承諾ヲ以テスルト皇帝ノ裁決ヲ以テス  
ルトトテ向ハス如何ナル場合ニ於テモ必ス之ヲ  
成立セシムヘシ會計豫美ナキ即チ憲法普及ノ  
政府タルノ批難ヲ避ケサルヘカラス

其方法タル會計豫美ニ関シハ議院ハサル場合  
ニ於テハ國君ノ主權ヲ以テ其闕漏ヲ補フヘシ

ト云フ比斯馬耳克ノ主義ヲ採用シタルモノナ  
リ按主義ハ王權ヲシテ全ク議院ノ推力ノ下ニ  
立タサラシメントスルトキニハ正当ナルフト  
疑ナシ然レニ其尚權ノ争議ハ國ノ爲ニ危険ニ  
シテ痛惜スヘキモノニシテ可成之ヲ避ケサル  
ヘカラス故ニ議院ノ承諾權ヲ豫メ憲法ニ規定  
シ會計豫美ニ関シテハ議院ヲシテ通常ノ法律  
ニ関スルト同一ナル自由権限ヲ主張セシメサ  
ルヲ以テ尤宜キニ適ストス

獨逸國ノ近時ノ國法上ノ學理ハ古來英國議院

議院權ノ永続ニハ不利益ナリ故ニ予ノ以上  
ノ意見ハ近時發育ノ國法ト同一轍ニ出ラタリ  
而シテ安學理ハ独リ國法學上ニ於テ正當ナル  
ノミナラス財政上ニ於テモ亦大ニ價值ヲ有ス  
ルモノナリ何トナレハ議院責任ノ行ハル、國  
ニ於テハ豫美漸時ニ増加シ從テ國民ノ負担重  
キヲ加フルコト實驗上ニ於テ明カナルハ是レ  
畢竟專制政治ニ於テハ主トシテ儉約ヲ重ニス  
ルモ議院政治ニ於テハ各自其責ニ當ラサルヲ  
以テノ故ナリ議院カ支出ヲ拒ムハ多クハ政事

上ノ権カヲ爭フ場合ニ非サレハ大臣ヲ更迭シ  
或ハ之ヲ窘蹙セシムルノ目的ニ出ルモノナリ  
之ヲ要スルニ議院ノ議院權ハ之ヲ大臣攻撃ノ  
兵器ニ利用スルモノニシテ君主政ノ主義ニ衝  
突スルモノト云フヘシ  
其他予ハ非常ノ需求ニ充テル為各省ノ通常ノ  
豫備金即チ處分權ノ外國債ヲ貯蓄スルヲ可ナ  
リト信ス英國債ニ関シテハ政府ハ法律及憲法  
ノ範圍内ニ於テ自由ニ之ヲ處分ニ得ルノ權ヲ  
有スヘキナリ

豫美超過ハ可成避クヘキコトナリトス然レモ  
不得已之ヲ生シタルトキハ預美上ノ支出ニ於  
ケルト同一ノ方法ヲ以テ後日ニ之ヲ處理スヘ  
キナリ

一月十三日

ハロエスル様

問

豫美ハ一部ノ全表トナシ議院ニ付シ議決ヲ經  
ルノ後ハ一部ノ法律トナル者ナリ然ルニ豫美  
中ニ左ノ二箇ノ異ナル性質ノ元素ヲ包含ス  
一 歳入中税法ノ従前ヨリ一定ニ毎年ノ豫美  
ニ由テ變動スヘカラサル者(善ノ第百九條  
ニ謂ヘルカ如シ)  
二 歳出ノ憲法又ハ法律ニ依テ永久又ハ數年間  
一定ニ毎年ノ豫美ニ由テ變動スヘカラサル者(美  
ノ歳出第一類及各國ニ於テ國王ノ經費及國



債償却其他法律ヲ以テ定メタル費用)

英ノ二ツノ種類ハ其豫美中ノ一部ヲナスニ構  
ラス全ク議院ノ議ヲ容レサル者タリ然ラハ議  
院ハ豫美ノ全部ヲ議決シテ一ノ法律トナス者  
ニ非スシテムシロ其一部ニ向テノニ毎年ノ議  
定ヲナス者ト云フヘシ憲法ニ於テ豫美ハ毎年  
之ヲ議定スト謂ヘルハ事實ト矛盾スルニ似タ  
リ  
英ノ撞着ニソキ憲法ノ説明者ハ何等ノ辨解ヲ  
ナスヤ英國ニテハ第一類ノトキニソリド

以テ支辨ス一キ部分ハ判然區別シテ之ヲ議院  
ノ議ニ付セスト聞久英國ノ法ヲ斟酌シテ豫美  
ヲ製スルニ明瞭ナル區別法ヲ用フ一キ數實下  
ノ教ヲ望ム

答

其間ニ関シテハ既ニ歳稅推ニ於ケル詳細ナル  
意見ニ於テ答ヘタリ毎年歳院ニ於テ豫美ノ一  
部ノミヲ承諾シ他ノ部分ハ承諾ヲ行サレハ固  
ヨリ矛盾ナリト雖他ノ部分ハ永久或ハ数年ヲ  
期シタルモノナリ故ニ定期或ハ毎年ニ非サル  
モ即チ一時ニ承諾シタルモノナリ又彼ノ英國  
ノ「ホニゴニソリ」ドヲ以テ元テタル支出モ亦  
一定不変ノモノニ非ス即チ千八百五十四年ニ  
於テ其支出中ヨリ削減ニシテ毎年歳院ノ承諾ニ

付シタルモノ教養アリ其改正ノ目的ハ收入支  
出ノ全体ヲ議院ノ直接ナル監督ニ付シ以テ國  
君ニ對スル議院ノ権力ヲ私大ナラシメントス  
ルニ在リ如斯議院ノ承諾權ハ法律ヲ以テ多少  
之ヲ制限スルヲ得ヘク又普國憲法百九條ニ  
拠ルニ既ニ法律ヲ以テ承諾シタル收入ハ毎年  
承諾ヲ受クルヲ要セサルコト明カナルニ於テ  
ハ古來是認セラレタル議院ノ自由ナル承諾權  
ハ不易ノ原則ニ非ス且立憲ノ性質中ニ必要ト  
シテ存スヘキモノニ非サルコトヲ斷言スル

ヲ得ヘシ畢竟其承諾ナルモノハ勢力上ノ向  
題ニシテ法律上ノ主義ニ非ス而シテ承諾權ハ  
法律上認メラレタル物体即チ國家ハ法律ヲ以  
テ保安セラレタル經濟上ノ生活ヲナスヘキ自  
然法ニ衝突スルノミナラス議院ノ権力ヲ國君  
ノ主權ノ上ニ置クモノナルカ故ニ君主制ノ憲  
法ノ主義ト矛盾スルモノナリ其等ノ顯著ナル  
承諾權ノ側点ヲ稱述セシカ為百條ノ制度ヲ設  
ケタル此普國ノ如キハ收入ヲ繼續シテ徵收ス  
ルヲ得ルモ豫美ナクシテ支出ヲナスコトヲ得

ナルカ故ニ支出ノ權ナキ收入ハ政府ノ為一モ  
効用ナキ矛盾ヲ免レサルナリ然事固ヨリ實際  
上ニナキ所ナレ凡論理上普國憲法ノ關点ニシ  
テ他ノ邦國ノ權限スヘカテサル所ナリ  
若シ承諾權ヲ採用セサルカ或ハ之ヲ正當ノ區  
域ニ復スルニ於テハ機械ノ制度ヲ設ケテ以テ  
恣許スヘキ議院ノ審査權ヲ曲ケテ實際ニ制限  
スルノ要用ナキニ至ルヘキナリ

千八百八十七年

ハロエスレル様

問

貴下ノ起草ノ憲法案第八十二條ニ見エタル政  
府ノ法律上ノ義務ニ基ツク支出トハ何等ノ事  
物ヲ指スカ又天皇ノ憲法上ノ權利ニ係ラ定ム  
ル支出トハ何等ノ事物ヲ指スカ更ニ其實例ヲ  
挙ケテ説明ヲ與ヘラレシト望ム  
答ノニツノ立言ノ意義ハ廣ク之ヲ解説スルト  
キハ凡ソ一般ノ行政上ノ支出ハ皆法律又ハ天  
皇ノ權利ニ係附シテ之ヲ包括スルヲ得一キニ  
似タリ果シテ然ルヤ又ハ適當ノ限界ヲ以テ解

叙スルヲ得ルヤリ

明治二十年六月三日

口エスレヨ

井上

答

憲法草案ノ第八十二條ノ理由及目的ハ所謂國  
會議院權即元老院若クハ代議士院ノ隨意ヲ以  
テ間接ニ皇帝ノ憲法上統治權ノ施行ヲ空シク  
セシメサルニ在リ憲法ハ一切ノ國權ヲ皇帝ニ  
歸ストシテ其權ハ憲法上ノ手續即憲法ニ掲ケタ  
ル制限ニ準シテ施行スヘキナリ若シ通例自由  
論者ノ言フ所然令之ヲ明之ニ掲ケサルモ其意  
義上不幸ニモ普國憲法ニ包含セル如キ議院權  
ヲ國會ニ予フルトキハ君主權利ノ憲法上ノ制

限ハ其適當ノ程度ヲ超過スルニ至ルヘシ何  
トナレハ施政權ハ殆ト皆財政上ノ支出ヲ要  
スルモノナレハ總テ議院權ノ爲國會ノ承諾  
ヲ受ケサルナキニ至ルヘク疑テ君主ハ其  
憲法上有スル所ノ權利ヲ獨立シテ施行スル  
コト能ハサルニ至ルヘケレハナリ然ル中ハ  
議院權ハ兼シテ共同統治ノ性質トナリ統治  
權ト國會權利トノ經界ハ全ク渾然シテ存セ  
ルニ近シ抑實際ニ在テ如英議院權ノ現存ス  
ル國アルナク英國普國ニ於テモ皆同ニ且

之ヲ實驗ニ徵スルニ如英議院權ヲ行フハ稀ニ  
人望ヲ失ヒシ大臣ニ對シ困難ヲ被ラシメ或ハ  
大臣ノ免職ヲ強迫スル爲ニ由ルノニ第二ノ場  
合ハ今日殆ト絶テ見サル所ニシテ大臣更迭ハ  
重要ナル政事上ノ向題ニ關シ政府ト議院トノ  
間ニ叶議ヲ得サルトキニ於テ之アルノニ  
獨逸諸國ノ憲法ヲ通觀スルニ多クハ自由ナル  
豫美承諾權ヲ議院ニ与フルコトナシ其原則ハ  
國法學者ノ皆是也スル所ナリ巴威爾ノ議院ハ  
全ク支出承諾權ヲ有セズ單ニ租稅承諾權ヲ有

スルノミ而シテ豫美ハ審査ノ為之ヲ提出スル  
ノミニシテ其承居スルキ租税ニ関シ議決ヲナ  
スヲ得ルノミ善シ或ハ支出ヲ是認セズ為ニ政  
府ノ請求シタルヨリ少額租税ヲ承居スル中ハ  
政府ハ其ノ少額ナル投入ヲ以テ満足セザルハ  
カテスト重政府ハ其承居ヲ得タル投入ヲ隨意  
ニ費用スルヲ得之ヲ詳言スルハ政府ハ議院  
ノ是認セザルニ毛抑ラズ其承居ヲ得タル金額  
或ハ其他處分スルヲ得ル範圍内ニ於テ支出ヲ  
ナスヲ得一ニ是レ千八百四十三年ノ憲法條義

書ニ明言スル所ナリ

其他ノ國ノ憲法ニ於テモ豫算ヲ議院ニ提出ス  
ルハ議院ニ於テ租稅承諾ノ必要ヲ判定スル為  
ノミニ止マルノ意思ヲ見ルヘク而シテ法律上  
又ハ其他ノ義務ニ基ク所ノ支出又ハ以前ニ是  
認シタル支出之ヲ拒否スルコト能ハサルノ  
明文ヲ掲クルノ國アリ(瓦敦堡第百十條百十一  
條索遜第九十七條十八百四十八年ノ華諾ル法  
律第九十一條大公國ヘツセシ第六十七條第六  
十八條カールヘツセシ第百十一條百十二條マ  
イニンゲンシ第百八十一條百八十二條アラウニシユ



ワイルト第百七十三條第百七十四條等又或ル國  
ニ於テハ例ヘハオランダニ第百八十七條索源第九十六  
條アルデニブルト第百二條國家需用ニ充ツル為國家自的  
ヲ維持スル為又憲法上政府ヲ繼續スル為必要ナル金額  
ハ之ヲ承諾スヘキ議院ノ義務ヲ明言マリ其他  
獨逸諸國ノ為既ニ維納決議書第五十七條第五  
十八條及十八百三十二年六月二十八日ノ聯邦  
決議ニ於テ國會ハ獨逸主權者ニ對シ聯邦ノ義  
務及各國憲法ニ適應セル政府ヲ維持スル為必  
要ナル金額ヲ拒否スヘカラサルコト及協議不

調ノ場合ニ於テハ中裁裁判所ノ裁決ヲ受クハ  
キコトヲ定メタリ  
議院ニ於テ政府ノ豫算ヲ承諾セサルトキト雖  
此ヲ以テ直ニ其事件ノ局ヲ結ビタリトナスハ  
カラズ或ハ索源憲法第百三條ニ於ケル如ク主  
權者ノ裁可ヲ以テ一年間其豫算ヲ實行スル  
リ或ハオランダニ第百九十一條ニ於ケル  
如ク中裁裁判所若ハ國家法院ノ裁決ヲ受ル  
リ普國ニ於テ比斯馬目克侯ハ政府ニシテ議院  
ノ拒否決議ヲ甘受スルノ義務ナキ説ヲ立テタ

ルハ世人ノ知ル所ナリ  
故ニ獨逸國法ニ據レハ議院ノ議稅權ハ全ク無  
限ノモノニ非ズ此權ノ由來ヲ尋ルニ畢竟租稅  
ハ人民ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ徵收スルニ能  
ハズト謂フヨリ外ナラズ即租稅承諾權ニ外ナ  
ラズ蓋租稅ノ承諾ハ固ヨリ一定ノ目的ノ為ニ  
スルモノナリト雖法律上ノ國家收入ヲ費用ス  
ルハ亦君主ノ意ニ任スルモノナリ  
廣キ意味ニ於ケル支出承諾權ナル語ハ國家及  
國權ノ性質ニ反對スル謬言ナリ

今ヤ豫算ニ關シテ政府ト議院ノ間ニ爭議ヲ生  
スルトキハ豫ノ如此爭議ヲ至當ニ裁決スルノ  
方法ヲ憲法ニ掲載スルハ其裁決ヲ當時ノ事情  
ニ放任ニ或ハ政府ヲシテ必ズ議院ノ議ニ服從  
セシメ或ハ議院ノ決議ニ拘ハラズ豫算キ  
政府ヲ存スルノ危險ニ陷ラシムルヨリハ一層  
至當ナルカ如シ予ク此事ニ關スル憲法上規定  
ハ即此意ヲ以テ起草セリト雖若シ此裁決ニ關  
シ更ニ一層適當ナル體制ヲ發見スルニ於テハ  
敢テ異論ヲナスニ非ズ例ハ政府ト國會トノ

問ニ登ルル... 其法律上問題ハ之ヲ官上法院ニ  
任カセ獨リ純然タル便宜上問題ノ裁決ヲ皇帝  
ニ歸スルヲ得ヘシ然ルトキハ政府ノ其爭議ニ  
關スル責任ノ多分ヲ避ルコトヲ得且立憲ニ背  
トル專恣ノ外觀ヲ避クルヲ得ヘキナリ  
然レ氏予ノ昔嘗テ於テ財政ニ關シ國會ニ予ヘ  
タル權利ハ決シテ僅少ナルニ非ズ即其中ニ就  
キ重要ナルモノヲ舉レハ左ノ如シ  
第一官有物ノ賣却譲渡新稅ノ徵收及國債ノ契

約ニハ必ス國會ノ承諾アルヲ要ス故ニ此規定  
ニ於テハ通例皇帝ノ裁決アルコトナシ  
第二豫算ニ關スル國會ノ審查權ハ費額ノ適法  
及多寡並豫算上支出ノ充ルノ方法ニ及ボスモ  
ノトス老練ナル政府ニ可成國會ノ意見ニ從フ  
コト疑ナリカレテ國會トノ無益ナル爭議ヲ避ル  
ナルヘシ故ニ國會ハ亦其審查權及異議權ニ依  
テ豫算決定上ニ大ナル勢力ヲ振フコト疑ナシ  
ト雖此事ニ關スル裁決權ノミハ國會ニ歸スベ  
カラス何トナレハ此裁決權アリトセハ既ニ陳

セシ如ク議院ハ共同統治權ヲ得ルニ均ク皇帝  
ノ憲法上統治權ハ其下ニ服従シ以テ實際憲法  
ヲ倒懸スルニ至ルハケレハナリ  
此重要ナル問題ヲ正當ニ判定セント欲セル宜  
ク會計豫算ノ本来ノ性質ヲ明カニセザルハカ  
ラズ元來豫算ハ國家ノ毎歲ノ收入支出ヲ整理  
編成シタルモノニ外ナラス此編成ハ獨リ行政  
上ノ効用ヲ有スルコト明カナリ即チ收入支出  
ノ平均ノ如キ總テ確定整頓シタル財政ヲ行フ  
ヲ得セシムルモノナリ故ニ憲法上ノ權利ノ關

係即皇帝ト國會トノ權利ノ區域ハ此レニ依テ  
定マルモノニ非サルノミナラス又君主ノ統治  
權ノ範圍及種類ハ豫算確定ノ必要ニ依テ變更  
スルモノニ非ス故ニ豫算ノ調製ハ君主ノ統治  
權ヲ減殺シ為ニ間接ニ憲法全體ヲ修正ナルノ  
理由トナルヘキニ非ス總テ行政ハ豫算ニ依テ  
行フヘキモノナレハ豫算ハ行政ニ對スル規準  
トナルヲ當然トス豫算ノ審査ハ行政ノ適法及  
多少其便否ヲ検査スルノ機會ヲ國會ニ予フヘ  
シト至此レニ依テ憲法上統治權ヲ妨害スルニ

至ルヘカラサルナリ

憲法上皇帝ノ有スヘキ權利ハ左ノ如シ

第一 法律ヲ施行スルコト

第二 勅令ヲ以テ行政機關ヲ組織シ及行政上

ノ原則及制度ヲ定ムルコト

第三 國家ノ利益ノ為特別ノ勅令ヲ發スルコ

ト例ハハ先急命令警察規則等ノ如シ

第四 本來ノ主權ヲ施行スルコト例ハハ戰ヲ

宣ハ條約ヲ結ヒ勳章ヲ設クル等ノ如キ

是ナリ

總テ此權利ハ法律ノ範圍内ニ於テ之ヲ施行ス

ヘシト雖法律ノ限束ナキ所ノ處ニ於テハ其施

行ヲ皇帝ノ意ニ任スルヲ當然トス何故ニ統治

權ニ係ル此等ノ事項ニ對シ國會ノ議稅權ヲ以

テ廢止シ國會ノ自由ナル決議ヲ以テ統治權ニ

代フヘキ事此問題ニ關シテハ一モ法律上ノ理

由ヲ見ズ只實際君主ノ權ニ懸スル議院ノ強大

ナル勢力アルノミ憲法ニ於テハ君主ノ權ヲ不

羈ニ維持スヘキヲ故ニ國會ノ議稅權ノ區域ニ

亦憲法ニ於テ定ムヘキナリ

今此原則ニ據シ、皇帝、隨意ニ國家ノ支出ヲ  
確定スルヲ得ル之ヲ限束スル者、如シ

第一 諸般ノ法律例、裁判所編制法、訴訟法、

治罪法、國債法等及家憲凡テ行政ノ自由

ヲ制限スル法律

第二 法律上ニ存スル國家ノ義務殊ニ契約、裁

判所ノ判決又ニ其他ノ權利名稱ニ基キ

義務

第三 行政部内ニ於テ、政府、又法律命令ノ

限束ヲ受ク、但命令、政府ノ手ニ於テ之

ヲ廢止變更スルヲ得ルモ其現行スル間

ハ均ク之ヲ遵守スヘシ

此ヨリ上ニ設ケタル問ニ對ヘント欲ス曰ク法

律契約等ヲ以テ皇帝ヲ限束セザルトキ即チ皇

帝ニ於テ隨意ニ行政ヲナシ能フトキハ皇帝ハ

又此カ為ニ必要ナル支出ヲナスノ權ヲ有セザ

ルヘカラズ若シ此種ナシトセバ自由行政ノ權

ハ其價值ヲ失ヒテ遂ニ無効トナルヘシ法律ニ

依ラサル所ノ支出ハ國會ニ於テ削除スルヲ得

ベシ小學校ノ建設道路橋梁衛生上ノ創設、如

キ法律ヲ以テ之ヲ町村或ハ教會ノ任ニ付スル  
トキハ此より出テ豫算中ニ入ルコトヲ得ズ裁判官  
ノ俸給ヲハ法律ヲ以テ定メタルトキハ其定額  
ノ外之ヲ豫算ニ掲ケルヲ得ズ皇帝ハ徵兵法ノ  
範圍内ニ於テ兵員ヲ定ムルヲ得此範圍内ニ於  
テ皇帝ハ又此カ為ニ必要ナル支出ヲナスヲ得  
ヘシ皇帝ハ軍制ヲ定ムルヲ得例ヘシ聯隊ヲ新  
設シ城寨ヲ設ケ軍艦ヲ製造及艦装スルカ如キ  
是レナリ皇帝ハ官職ヲ新設スルヲ得即參議院  
ヲ新設シ議官ノ數及其俸級ヲ定ムルカ如キ是

レナリ之ヲ要スルニ皇帝ノ憲法上權利ノ行ハ  
ル、所ニ於テハ皇帝ハ亦此カ為ニ必要ナル支出  
ヲナスノ權ヲ有セザルヘカラス若シ皇帝憲法  
外ニ於テ元老院議官ノ俸級ヲ予ヘント欲スル  
モ其權ナク又法律ニ於テ其權ヲ予ヘラレタル  
トキハ非レハ國債ヲ償却スルノ權ナシ巨大ノ  
費用ヲ要スル工業博覽會ノ如キハ例外ニシテ  
此事タル行政上ノ創設ト做スヲ得ベク又職務  
上義務ヲ有セサル官吏即冗官ノ新置等之ニ均  
シトス今大體上ヨリ之ヲ論スレハ行政上一切

ノ支出ハ特別ノ例外ノ判然タル者ヲ除ク外皇  
帝ノ権利内ニ包含セラル、コト当然ナリト雖  
予ハ此レカ為憲法上ノ制限ノ存スル所ヲ再陳  
セントス

第一、皇帝ハ現在ノ收入ヲ以テ之ニ充ツルヲ得  
ルトキ或ハ郵便税手数料等ヲ増額シ新收入ヲ  
得ルノ権アルトキニ限り支出ヲナスヲ得然レ  
氏新税ヲ興シ或ハ官有物ヲ賣却シ或ハ國債ヲ  
契約スルヲ以テ支出スルコト能ハサルナリ  
第二、國會ハ支出ノ額ニ就テ異議ヲ述フルノ権

ヲ有ス故ニ過度ノ俸給或ハ其他ノ支出ヲ非難  
スルヲ得ヘシ

第三、國會ハ自ラ裁決スルノ権ナキ場合ニ於テ  
常ニ皇帝ニ建議請願願訴スルノ権ヲ有シ此ニ  
依テ支出権ノ施行ヲ制限スルヲ得ヘシ  
十八百八十八年六月十日

ロエスレル拜



問

荷蘭白目義伊太利ノ會計検査院ハ會計ノ決算  
 ヲ事後ニ検査判決スルノミナラズシテ又一切  
 國庫ノ支出命令ニ向テ事前ノ承諾ヲ予フルノ  
 制度タリ此ノ其他ノ各國ヨリ一層重大ノ職権  
 アル者ナリ此ノ職権ハ實際ノ結果ニ於テ何等  
 ノ利害得失アルトテ驗明シタル乎又各國ニモ  
 採用シ得ヘキノ方法ナル乎貴下ノ教ヲ乞フ

明治二十年六月五日

井上

ロスレル氏

答

白耳義憲法第百十六條ニ據ルニ會計検査院ハ  
 支出豫算中ノ費目ニ超過シタルモノトキヤ否  
 及其汎用即十一費目ヲ豫算表ニ定メラレタル  
 ヲリ他ノ目的ニ使用シタルトキヤ否ニ付キ  
 監督スルノ義務アリ彼ノ凡ソ官廳ヨリ發スヘ  
 キ支出命令ハ豫ノ會計検査院ニ於テ認可スヘ  
 シトノ規定ハ本條ヨリ生シタルモノナリ實ニ  
 獨リ此方法ニ據リ豫算表ニ違背スルノ支出ヲ  
 有効ニ妨クルヲ得ハシ若シ官廳ニシテ自己一

個ノ權利ヲ以テ支出命令ヲ發スルヲ得而シテ  
國庫ニ於テ必ズ此命令ヲ遵守スルヘキハ豫算  
ニ違背スル所ノ支出ハ妨ケテ受クルトナカル  
ヘク而シテ検査院事後ニ之ニ對シ故障ヲ為シ  
當該官吏若クハ大臣ニ責ヲ歸セントスルモ事  
既往ニ屬シ此場合ニ於テ豫算ニ違背スル支出  
ニ對スル賠償ヲ得ントスルモ到底実行シ能ハ  
サルヘシ予曩ニ「グリエツセル」<sup>レ</sup>滞在中此事ニ付  
キ質問ヲ為セシニ前述規則ノ嚴ニ遵守セラレ  
、<sup>レ</sup>トヲ發見セリ此方法ノ利益ハ豫算表ヲ嚴ニ

遵守セシメ且官廳及大臣ヲシテ官金ヲ隨意ニ  
處分セシメザルニヤリ此方法ニシテ實際ニ行  
ハル、上ハ豫算超過ハ生スルニ由ナキナリ  
然ルニ白目義ニ於テモ此方法ニ一ニ、例外ナ  
リ嘗テ「ニール」<sup>レ</sup>於テ國王ハ假支出ヲ  
許スル權ヲ有セリ今日ノ方法ニ於テモ検査院  
支出ノ許可ヲ拒ムルハ内閣會議ニ於テ事件ヲ  
討議シ若内閣其責任ヲ以テ支出ヲ命スル所ハ  
検査院ハ後議ヲ待ツト云テ其認可ヲ予ヘサル  
ヘカラス其待後議ノ理由ハ毎年ノ報告中ニ記

議院ニ提出セラルルヘカタク  
是ニ由リ之ヲ觀シハ白耳義ニ於テモ縱令内閣  
責任ヲ以テシ且一定ノ要件ヲ以テスルモ豫  
算超過ハ猶免ルヘカヲナルモノナリ又白耳義  
ノ方法行ハレザル邦國殊ニ獨逸及佛國ニ於テ  
ハ豫算ノ超過ハ後ニ議院ノ認可ヲ受ケルヘキナ  
レタリ此後日ノ認可ハ唯一ノ形式ナルニ過  
ス何トナレバ既ニ為セル支出ハ復之ヲ還スル  
コト能ハレハナリ而シテ當該大臣ニ對スル  
ノ民法上ノ責任ハ多クハ之ヲ實施シ能ハサル

ヘシ

議院ニ無限ノ豫算議決權ヲ予フルハ各省ト共  
ニ政ヲ執ル一種ノ權ヲ予ヘタルト一般ナル如  
ク白耳義ノ検査院ハ上ノ方法ニ據ル片ハ行政  
ニ對シ一種ノ監督權ヲ有スルモノナリ何トナ  
レバ精嚴ニ論スル片ハ各省ハ豫ノ検査院ヨリ  
財政上ノ許可ヲ得ザル以上ハ行政事務ヲ行フ  
ヲ得ザレハナリ故ニ白耳義ニ於テハ検査院ノ  
官吏ハ議院之ヲ選舉シ政府ヲ監督スル為ニ議  
院ヨリ派出シタル一種ノ常置委員ナリ是ニ至

リ議院ノ議事権利ハ行政ノ範圍内ニ及シ而シ  
テ是カ為ニ政府ト議院トノ權限ヲ混同セリ故  
ニ政事上ノ點ニ付キ白耳義ノ方法ハ日本ノ為  
ニ之ヲ採ルヲ勸告セズ而シテ又財政上ノ點ニ  
付キ之ヲ觀ルモ全ク其目的ヲ違ヒリト云フヲ  
得ス何トナレハ豫算超過ハ何レノ國ニ於テモ  
全ク避クルヲ得サルモノナリ蓋必要若ハ有益  
ノ支出ハ一個年ニ對シ豫見スルコト能ハサレ  
ハナリ  
予ノ知ル所ニ據レハ白耳義ノ方法ハ絶エテ他

國ニ行ハル、トナシ佛國ニ於テハ左ノ明文ア  
リ獨リ出納官(コンダブル)検査院、裁判權ニ服  
從スヘシ命令官(ラルドナテール)ハ之ニ服從ス  
ルヲ要ヤスト是レ行政ノ活動ヲ妨クルヲ恐ル  
ルニヨリ設ケタル規定ナリ  
千八百七十二年三月二十七日、普國検査院法  
律ニ依レハ其事務トシテ左ノ事項ヲ掲ケタリ  
一、國庫金ノ收支計算ヲ審査確定シ以テ國家  
ノ經濟ヲ監督シ且國有財産ノ増減及國債ノ  
管理ヲ監督スルト

二、官有財産、收得使用及賣與並ニ國家ノ收入及租稅徵收ノ現行法律及條規ニ準據シ且重要ナル行政原則ニ從ヒ施行セラル、ヤ否又決算ニ依リ行政ノ成績ヲ觀察シ以テ國家ノ目的ヲ増進スル為メ之ヲ改正スルノ必要若クハ便宜アルヤ否ヲ視察スル

三、豫算超過及豫算外ノ支出ニ付キ未タ國會ノ認可ヲ得サルヤ否

検査院ハ毎年報告ヲ國王ニ提出スヘシ又議院ハ此報告中ニ官廳ノ支出命令ニ付キ批評ヲ為

スルヲ得但支出命令ヲ許可スルヲ得ス英國ニ於テハ検査官エキスチユクワランヲ發シ其方法稍ニ白耳義ノ検査法ニ類似セリ

十八百八十七年

六月十三日 博士ロエスレル拜具

答

會計検査院ノ資格ニ關スル意見

凡ソ財政ハ憲法ノ如何ナル体裁ニ於テ定メラ  
ル、ヨリ問ハス經常ノ監督ヲ要スルモノナリ然  
レ氏專制ノ國ニ於テハ此監督ハ重モニ唯數字  
上ノ審査ニ限レリ  
然ルニ國家漸ク發達シテ法律ニ基キ政事ヲ行  
フニ至ル所即チ法治國トナルニ至リ此監督モ  
亦進歩シ財政ノ果シテ法律及豫算表ニ適合ス  
ルヤ否ヲ審査スルトナレリ

若シ國會ニ財政ノ整理ニ參與スルノ權ヲ予フ  
ルハ勿論此監督權ヲ予ヘサルヘカラス決算  
ヲ監督シ且其完結ニ付テノ決議權ヲ予ヘサル  
ハ徒ラニ唯豫算表ノ確定ニ參與セシムルモ  
何ノ益カアル予ノ信スル所ニ依レハ國會ノ財  
政ニ參與スルノ利益ハ唯此ノ一點ニアリテ彼  
ノ豫算表ノ確定ニ參與スルカ如キハ之ニ比ス  
レハ至テ微々タルモノナリ而シテ此權利タル  
政府ニシテ公行ヲ嫌ハサル以上ハ少シモ躊躇  
スルエトナク之ヲ予フルトテ得ベシ此點ニ付

テハ各國ノ憲法殆ト一定ナル所ナリ  
然リ而シテ國會ハ自ラ計算ノ監督ヲ決行シ能  
ハサルカ故ニ此事務ヲ獨立ノ機關ニ委任セサ  
ルヘカラス而シテ此機關ハ總ニ財政事務ヲ審  
査シ且國會ニ對シ計算ノ數字上ノ正否ヲ確定  
スルノミナラス又國會ノ參與ヲ經テ確定シタ  
ル條規殊ニ豫算表ノ果シテ遵守セラレタルヤ  
否ヲ確定ニスルモノナリ此機關ハ則チ會計檢  
査院ナリ抑々會計検査院ノ組織殊ニ其國會ニ  
對スル位地ニ付テハ各國異同アリト雖モ國會



會計検査院ノ豫ノ決算ヲ検査シ其報告ヲ為シタル後完結ノ決議権ヲ有スル一ニ付テハ各國概ネ一輒ニ出タリ然リ而シテ財政ノ憲法ニ準據スルヤ否ヲ確實ニスルニハ此方法ヲ以テ未タ完全ナルモノトセズ蓋此方法ニ據ルハ収入支出ノ既ニ終リタル後ニ始メテ監督ヲ行フモノニシテ縱令國會ニ於テ完結ヲ拒ムノ決議ヲ為スモ最早豫算表ノ毀損ヲ恢復スルヲ得ス而シテ大臣彈劾法ノ完備スル國ニ於テモ其責任ハ唯稀ニ一ノ訴訟方便トナルニ過サルノ

ニ故ニ立憲制度ノ國ニ於テハ既往ノ事實ヲ審查スル代リニ未成ノ違犯ヲ豫防スルノ方法ヲ設ケザルヘカラス最近澳國著述者ノ語ニ依レテ監督ノ行政ノ行為ニ對スルノミナラス其意思ニ對シテ之ヲ施行スヘシ又監督ハ既成ノ不正ヲ發見スルヲ以テ足レリトムヘカラス必ズ豫ノ意思ノ施行ヲ妨クルヲ以テ目的トスヘシト云フ

既ニ人ノ知ル如ク國庫ハ管轄官廳ニ命令ナクシテハ收支スヘカラスモノナリ各國ノ法ニ

依レハ行政長官若シ其委任ヲ受タル官吏此ノ命令ヲ發スルノ權ヲ有セリ故ニ有効確實ノ監督ヲ實行セシムル行政大臣ニ隸屬セシメテ裁判官ノ資格ヲ有スル所ノ獨立ノ官廳ヲシテ國庫ニ於テ收支セサル前ニ當リ收支命令ヲ發セシムルカ又ハ之ヲシテ其發布ヲ許可セシムルヲ要ス

此方法ヲ主張シタル所ノ最高學者ハ「ローレンツ」フオシ、スタイン氏ナリ氏ハ此方法ノ為ニ命令ノ監督ナル新語ヲ發見セリ蓋然前ニ專ラウ

イサコントロールノ語ヲ用ヒタリ(例ヘハ「ワグチ」ノ如キ是レナリ)氏ハ此監督ヲ會計検査院中特別ノ局ニ委任シ且其他各省及各出納本局ニ其直轄監督課ヲ設置セントセリ

此ノ如キ組織ハ未タ曾テ行レタル「アラザル」モ唯狹隘ノ區域ニ於テ命令ノ監督ヲ實行スル邦國アリ即チ白耳義(千八百四十六年十月二十九日ノ組織法)和蘭(「クタイン」)此國ヲ論セザルハ怪ムヘキナリ(英國(千八百六十六年ノ出納條例)及伊太里(千八百八十四年二月十七日ノ法律

然レ氏予ハ未タ之ヲ一見セズナリ

然レ氏立憲國家學者ハ此命令監督法ヲ如何ニ  
主唱スルモ(グナイスト氏モ亦其一人ナリ)予ハ  
實際ノ便宜ニ基キ此方法ヲ日本ニ施行スルノ  
説ニ反對セサルヘカラス其理由トスル所左ノ  
如シ

一 白目義ニ於テ、實驗ニ據レハ此方法ハ善  
良ノ結果ヲ表シタリ加之其國ノ最高經世家ハ  
經濟ニ於テ最モ有名ナル著述者ニ向テ(ワオック)  
此方法ハ白耳義國ヲ救ヒタリト断言セリト聞

ク又和蘭ノ如キモ此方法ニ付キ其非ヲ訴フル  
者アルヲ聞カズ然レ氏小國ニ於テノ實驗ハ大  
國ニ利用スルヲ得ス又有名ナル財政學者ノ一  
人ナル「ワオック」並ニ「ワグネル」エドナル「ツエ  
ニツク」等ノ諸氏ハ此ノ如ク會計検査院事務  
ヲ他國ニ遷シントスルモ到底為シ能ハサルモ  
ノト認メタリ英國會計検査官(コントロール)セ  
ネテル(命令監督)全ク形式上ノ所為ニ屬シ  
實體上ノ効力ナキトスタイン氏自ラ之ヲ認メ  
タリ其他ノ大國ハ此方法ヲ主張スル徒ノ希望

懇到ナルニモ拘ラス白目義ノ組織ヲ模倣スル  
コトシ獨伊太里ハ此方法ヲ採用シタルモ仍ホ  
新制ニ屬シ其確實ナル實驗ヲ知ルニ由ナシ  
二 凡ソ有カナル行政ハ今令監督ノ如キ羈絆  
ヲ避ケルヲ務メサルヘカラス是レ「スタイン」氏  
ノ同意スル所ナルハ蓋歐羅巴大國ノ此方法  
ヲ採用セサル所以ニ想フニ此一點ニ歸スルナ  
ルヘシ日本ニ於テハ予ノ屢論述スル如ク堅固  
ナル政府ノ権柄ヲ必要トスルノ事情アレハ後  
ニ立憲國家論ノ學說ヲ愛シテ遂ニ彼ノ監督法

ヲ實施シ以テ政府ノ行為ノ自由ヲ制限スルノ  
誤ヲ蹈マサルコト肝要ナリ抑會計検査院ニシ  
テ豫算表ニ基キ行政廳ヨリ要求セラレタル命  
令ヲ發シ又ハ之ヲ許可シ若ハ之ヲ拒否スルノ  
権アルカハ遂ニ行政各機關ノ行為ヲ妨クルニ  
至ルハ免ルヘカラサルノ結果ナリ「スタイン」氏  
ノ英敏ニシテ之ヲ看破セサルハ何ソヤ然レ氏  
「スタイン」氏ハ此法律上ノ問題ハ大臣ノ彈劾ニ  
關スル法律ヲ以テ會計検査院ノ責任長官ニ適  
用シ以テ解釋スルヲ得ルト信セリ果シテ此方

法ノ立憲制度殊ニ豫算及大臣責任法律ノ完全  
スル邦國ニ於テ行ハルヲ得ルヤ否ハ暫ク之  
ヲ論セス日本ニ於テハ此ノ如キ大臣責任ノ法  
律ヲ制定スルヲ使ヒテ而シテ又完全ナル豫  
算法律ハ西三年中ニ之ヲ見ルヲ得サルヘシ凡  
ソ世界各國ノ憲法中未ク豫算法ヲ完全ニ編纂  
シタルモノアラズ實ニ此點ニ各國憲法ノ關典  
ナリ各國ハ皆此點ノ議院實際ノ經驗ニ依リテ  
確定セザルベカラザルヲ悟リ而シテ一二ノ  
邦國(巴丁及プロシヤヘツセン)ニ於テハ數

年間ノ經驗ヲ經テ特別ノ法律ヲ制スルニ至レ  
リ日本ハ將來尙スシク不完全ノ豫算法ヲ有ス  
ヘキヲ以テ此法ニ付キ種々ノ紛議ノ起ルヲ免  
レサルヘキカ故ニ若シ會計検査院ニ此ノ事務  
ヲ委任スル所ハ會計検査院ノ行政機關トシテ  
ニ常ニ爭訟ヲ起シ國務ヲ妨害ヲ爲スニ至ルハ  
ハムヲ得サルノ結果ナルヘシ此場合ニ於テ此  
爭訟ヲ裁判スヘキモノハ會計検査院ナルヤ又  
ハ各者ナルヤ此二者ハ共ニ原告ナリ故ニ  
此裁判ハ第三者タル獨立ノ機關例ヘハ最高行

政裁判所ニ任セサルヘカテス英國ニ於テハ各  
者ハ會計検査官ノ處分ニ對シ其拒ミタル命令  
ノ發布ヲ國王ハ裁判所ニ訴フルヲ潔白耳義ニ  
於テハ之ニ及シ内閣其責任ヲ以テ支出ヲ為サ  
ントスル片ハ會計検査院ノ檢印ヲ拒ムニ拘テ  
ス之ヲ命令スルヲ得而シテ會計検査院ハ此場  
合ニ於テ待後議ノ名ヲ以テ之ヲ監督ス然レハ  
此方法ハ遂ニ全ク其價有テ失フニ至ルヘシ何  
トナレハ此制タル會計検査院ニ於テ決算ノ憲  
法ニ適スルヤ否ニ付キ議院ニ其意見書ヲ提出

シ而シテ各省ハ議院ニ對シ豫美ノ超過ニ付キ  
責任ヲ有スルノ方法ト同一ノ點ニ歸スルニ過  
キザレハナリ然ル片ハ各省ノ至當ト認ムル支  
出ハ會計検査院ノ異議ヲ為シ拒否セラル。一  
ナキニ至ルヘク若シ時トシテ之アリトスルモ  
此ノ方法ニ由リ政府ノ行為ノ自由ヲ制限スル  
ノ弊ニ比スレハ其得失相償ハサルナリ  
三 命令ノ監督ニシテ有力ノモノタラシメニ  
ニハ大國ニ於テハ一ノ中央廳ヲ置クノ外尚此  
目的ノ為ニ特別ノ監督課ヲ各省及出納本局

設ケザルヘカラス然ル所ハ是ガ為ニ官吏ノ多クヲ要スヘク又此官吏ニシテ行政上ノ勢力ニ對シ充分獨立ノ地位及必要ナル學カラ有スヘキ所ハ必ス高給ヲ仰ク所ノ高官官ナラサルヘカラス然ル所ハ日本ニ於テ適任ノ人ヲ得ルヤ否ノ問題ハ之ヲ度外ニ置クモ行政ハ為ニ費用ヲ增加スルニ至ルヘシ

總令又一ノ中央廳ヲ設クルニ止マルトスルモ是カ為ニ政費ヲ増シ事務ヲ滯滞シ又ハ英國ニ於ケル如ク純然タル形式ニ止マルニ至ルヘシ

四 然リ而シテ其最モ困難ナルハ左ノ一點ニアリ凡ソ政府ハ如何ナル良意ヲ以テスルモ豫算表ヲ遵守シ能ハサルノ場合ナシトセズ實ニ豫算ヲ超過及豫算外ノ支出ハ全ク避クヘカラリルモノナリ命令監督ノ方法ニ據ル所ハ此場合ニ於テ政府ハ如何ナル手段ヲ用ユヘキカ字漏士ニ於テハ此場合ニ於テ大藏大臣ノ認可及國王ノ制可ヲ要ス佛國ニ於テハ議院ノ開會中ハ其認可ヲ要シ閉會中ハ參事院ニ於テ發シ内閣ニ於テ認可シタル命令ヲ要シ(千八百七十九年

十二月十四日ノ法律其他ノ邦國ニ於テハ内閣ノ決議及國王ノ制可ヲ要ス其他凡ソ立憲制ノ邦國ニ於テハサクモ事後ニ國會ヲ認可ヲ受ケザルヘカラス「スタイン氏」ヨイヒス、左ルオルト「メンゲ」即チ國王ノ制可ヲ受ケタル内閣決議ノ外ニ會計検査院ノ認可ヲ要セシメ以テ之ヲシテ内閣ノ責任ニ預ラシメント欲シ且因テ生スル弊害ヲハ會計検査院長官ノ辭職權ニ依リ之ヲ除去セントセリ然レ氏此ノ如キ組織ハ從來何レノ邦國ニ於テモ試ミラレタルトナシ蓋

日本ニ於テハ創メテ此試驗ヲ為スコトヲ敢テセサルヘシ想フニ日本ニ於テモ豫算超過ノ對シ内閣員ノ對署シタル天皇ノ命令ヲ要スルトテ定メ且國會ニ一般ニ豫算表ヲ議スルノ權ヲ予ヘシ以上ハ又此ニ付キ事後ニ國會ノ認可ヲ要スルトテ憲法ニ定ムルヲ便トスヘシ而シテ此限界ヲ超越シテ權利ヲ予ヘサルヲ以テ宜シトス

豫算超過ヲ明瞭ニスルハ固ヨリ必要ナリ而レテ之ヲ明瞭ニスルニハ會計検査院ヲシテ事後



ニ検査セシメ且之ヲシテ報告ヲ作ラシメ之ヲ  
國會ノ決議ニ附シ完結スルヲ以テ充分ナリト  
ス故ニ予ハ予ノ常ニ敬重スル「普國憲法改正論  
百九十四乃至百九十六頁」著者ノ會計検査院ヲ  
シテ支出命令ヲ監督セシムルノ説ニ反對セサ  
ルヘカラス

東京千八百八十七年

六月十日

モツキ

問

租税ノ代ニ報償又ハ寄附ノ名義ヲ以テ人民ニ  
賦課スルハ各國古代ノ歴史ニ於テ往々例見ス  
ル所ナリ故ニ此弊實ニ寒カシキ為ニ英國ノ法律  
及其他ノ或國ノ憲法ハ此條ヲ設ケテ嚴確ニ之  
ヲ禁制シタリ此事ニ付足下ノ意見ト並ニ足下  
ノ起草第六十條ノ説明ヲ与ヘラレシトテ望ム

二十年六月五日

ロエスレル君

答

租税ハ國家ノ一般ノ支出ニ供スルカ爲メ國家  
ニ納ムルモノニシテ或ハ納税義務者ノ自由ナ  
ル承諾ニ由ルカ或ハ國會ノ議決ニ因リ徵收ス  
ルモノナリ此義解タル直税及間税ニ適当スル  
モノナリ即チ凡ソ租税ハ直接ニ義務者ノ財産  
若ハ收入ニ課シ又ハ間接ニ物品ノ價額若ハ他  
ノ標準ニ據リ一定ノ物品(此場合ニ於テモ該品  
ヲ購買消費スル者納税義務者ナリ)ニ課スルヲ  
謂ハズ皆此義解中ニ入ルモノナリ此ノ如ク租

税ハ一私人カ國家ノ需要ノ為ニ自己財産ノ一部ヲ抛ツモノナリ故ニ租税ハ通常法律上ノ規定ニ據リ即チ國會ノ認可ヲ受ケテ之ヲ徵收スヘシトノ立憲制ノ原則ヲ生スルニ至ル何トナレハ若シ此方法ニ由ラサルハ財産ハ耗スヘカラストノ原則ニ背クモノナレハナリ  
直税ハ地租營業稅及收入稅ナリ間稅ハ輸出入稅及消費稅即チ内國ノ物産ニ課スル租稅例ハ麥酒稅葡萄酒稅塩稅砂糖稅燒酎稅等ナリ  
此租稅ノ外ニ尚國家ニ納ムヘキモノ種類アリ

此種類ニ付テハ人民ノ承諾ヲ要セズ此種類ハ報償ノ性質ヲ有シ恰モ民間ニ於テ物品ヲ購買シ其價ヲ拂フト一般ニシテ例ヘハ公共施設物ノ使用ニ對スル報償又ハ官廳ノ行為ニ對スル報償ノ如シ又此種類ハ國家ノ一般ノ支出ニ供スルモノニテラス其施設物ノ使用若ハ其行為ノ為ニ國家特別ノ費用ヲ償フモノナリ而シテ其費用ヲ償ヒ尚國家ニ剩餘セル中ハ始メテ其餘金ヲ以テ國家一般ノ支出ニ供スルモノナリ  
此報償ハ獨逸ニ於テハ通常手數料若クハ「タキ

スレト稱ス佛國ニ於テハ多クハ「ドロ」英國ニ於  
テハ「フイ」ト稱ス獨逸ニ於テハ「往古之  
ラ」通常特權ノ收入ト稱セリ

此報償ハ行政ノ各部及一般ニ國家ノ行為ニ對  
シ納ムルモノユシテ其重要ナル種類ハ左ノ如

一 司法ノ部 訴訟費書類ノ調製及公証料或  
ハ帳簿登記料、証書下附料等

二 交通ノ部 郵便手續料(信書包物)電信料、鉄  
道賃(人及物品)等

三 通船ノ部 港金燈臺金、船舶測量及登記料  
等、運河、江河、橋梁費等

四 教育ノ部 授業料、證書及試験料等  
其他各種ノ行政事務ニ付キ尚教種ノ手教

料アリ例ハ金銀貨鑄造料、金銀器具ノ保証  
料、版權免許料、專賣特許料、旅券料、爵位及官職  
附與手續料、度量衡公證料等

以上ノ手續料ハ國會ノ特別認可ニ基キ徵收ス  
ルモノニテラスシテ國家カ一個人ノ為ニ手教  
ヲ帶シ又ハ其利益ノ為ニ公共施設物ヲ保存ス

ル費用ヲ補償スルモノナリ故ニ國家ニ對シ此  
ノ如キ手数料ヲ求メサル者ハ國ヨリ手数料ヲ納  
ムルハ義務ナシ又訴訟ヲ起サ、ル者ハ訴訟費  
ヲ拂フヲ要セス信書ヲ郵送セサル者ハ郵便料  
ヲ拂フヲ要セス鐵道汽車ニ乗ラサル者ハ鐵道  
切手ヲ買フヲ要セサルナリ

而シテ形貌ハ手数料ナルモ其性質及目的ニ於  
テ真誠ノ租稅ナルモノアリ例ヘハ登記料若換  
印紙料及領書印紙料相續手数料ノ如キ若ク動  
産ニ稅ヲ課スル者ニ徵收スルモノナリ又河船

通航料トニシテ若ハ噸料トニシテ

如キ物品ニ關稅ヲ課スルト  
同一ノ目的ヲ以テ課スルモノナリ此ノ如キ場  
合ニ於テハ手数料ハ報償ノ性質ニアラズレテ  
租稅ノ性質ヲ有スルモノナレハ國會ノ承諾ヲ  
受テガムベカラズ

純然タル手数料ハ専ラ行政ノ區域ニ屬シ之ヲ  
納ムルハ當然ノ義務ナリト雖其額ニ付キテハ  
疑問ナキコト能ハズ抑、手数料ハ第一其施設物ノ  
費用ヲ補償セサルヘカラズ第二務ニテ公益ノ  
目的ヲ達スルヲ旨トセサルヘカラズ然ルニ行

政ハ場合ニ依リ剩餘ヲ求ルヲ得而シテ之ヲ  
為ニ其施設物ノ公ケル目的ヲ妨ケサル以上ハ  
手教科タル性質ヲ害スルヲナシ

又國家ハ場合ニ依リ全ク手教科ヲ徵收セサル  
ヲ得是レ或ル施設物ノ公ケナル目的ニ於テ之  
ヲ便トシ且其費用ノ他ニ於テ得ラル、場合ナ  
リ例ヘハ行政ノ便ニ從ヒ新設橋梁及道路ノ使  
用ニ就キ或ハ手教科ヲ徵收シ或ハ之ヲ徵收セ  
サルヲ得

又手教科ハ時トシテ國約ニ基キ徵收スルヲ得

例ヘハ萬國聯合郵便及電信條約ノ如キ是レ  
ナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ手教科ハ裁判費ヲ除クノ  
外全ク行政ニ屬シ行政ノ由テ以テ運動スル要  
件ノ一ニ居レリ故ニ之ヲ定ムルハ行政ノ必要  
ニ屬ス

草摺第六十條ノ規定ハ總テ租稅ノ性質ニ於テ  
セズ報償ノ性質ニ於テ國家ニ納ムル所ノモノ  
ニ關シ左ノ理由ニ基クモノナリ

第一手教科ハ自己ニ權利上ノ名義ヲ有スルモノ

ナリ故ニ議院ノ承認ヲ要セス其額ハ行政上ノ關係ニ基キ定ムルモノニシテ專行政ノ需用ニ屬ス此施設物中一私人若ハ會社ノ設置スルヲ得ヘキモノ少シトセス之ヲ設置スル場合ニ於テハ一私人若ハ會社自ラ其使用費ヲ定ムルヲ得例ヘハ私立學校私立鐵道ノ如キ是ナリ  
獨逸ニ於テハ大體ニ於テ同一ノ原則行レタレ  
氏近時ニ至リ殊ニ司法事務ニ關スル手續並ニ一ニ行政手續ノ為ニ多クノ例外ヲ設ケ

タリ是レ重要ナル行政事件ニ對シ過テ法律ヲ以テ規定シタル結果ナリ  
巴威爾ニ於テハ鐵道運賃及蒸汽船運賃並ニ多  
腦及迷因運河ノ運賃ニ付テハ國會其最高額ヲ定メ普國憲法百二條ニ從ヘハ官吏ノ手續料ハ唯法律ニ基キ定ムヘキモノトス然レモ此手續料トハ狹隘ノ意義ニ屬シ重ニ官吏俸給ノ一部ト看做スヘキ裁判及行政手續料ナリトス往昔此手續料ハ弊害ノ在ル所ニシテ容リニ其額ヲ增加シ為メニ租稅ノ性質ヲ有セシムルニ至レリ

其地行政上ノ收入ハ多ク行政部ニ於テ之ヲ定  
ム獨逸帝國ニ於テハ信書色物及新聞ノ郵便料  
ハ法律ヲ以テ定ムルモ其地ノ郵便料ハ驛遞  
局其命令ヲ以テ之ヲ定ム又鐵道運賃及授業料  
ノ如キハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルノ行政部ノ收  
入ハ行政部自ラ之ヲ定ムルノ權アリトハ一般  
ノ通規ナリ少クモ法律ヲ以テ別段ノ規則ヲ定  
ムガル上ハ行政ニ於テ之ヲ定ムルノ權アリト  
推測スベキモノナリ(ペウル巴威爾國法第二百  
二十條第二)

千八百八十七年

六月十四日

博士ハ、ロエスレル拜具



向

米國ノ議院ハ豫算議決ニ付無限ノ全權ヲ握ル

カ為ニ其濫弊ハ法律ニ拘ラズシテ必要經費ヲ

拒絶スルニ至ル即チ十八百七十七年ニ兵隊ノ給料ヲ全ク議決セズシテ無給ノ

ルノ兵隊ヲラシメ夕獨逸ノ憲法ニ於テ兵備ノ上

ニ付此ノ弊ヲ避ル為ニ議院ノ兵備ノ經費ヲ議

決スルハ兵備編制ノ法律ニ遵據スヘキコト又定

メタリ

立國ノ組織ノ為ニ必要ナル經費ハ特ニ兵備ノ三

ナラズ此ノ獨逸憲法ノ正條ヲ以テ之ヲ各般ノ經

費豫算ニモ適用スルハキハ既ニ貴下ノ教ヲ得タル  
所ナリ  
但シ此ニ疑題トスヘキハ議院ハ此ノ法律ヨリ  
生スル必要ノ經費ヲ拒絶スルコトヲ得ガルト  
スルモ仍法律ニ一定ノ費額ヲ明示セザル事項  
ニ向テ政府ノ提出セル豫算案ノ費目ヲ節減シ  
テ之ヲ議定スルコトヲ得ベキカ  
果シテ然ラハ議院ハ又節減ヲ名トシテ幾ト拒  
絶ト其結果ヲ企シクスル所ノ議定ヲナスコトヲ  
得ヘシ何トナレハ必要ノ費目ヲ過度ニ減少

セラルトキハ其費目ニ依リ取扱フヘキ事務  
ハ既ニ成立スルコト能ハザレハナリ此ノ場合  
ヲ避ル為ニハ何等ノ適當ノ制限アルヘキヤ  
乞教

明治二十年六月五日  
ロスレル君貴下

答

予ノ所論ニ據レハ議院ノ豫算議決權ハ憲法ニ  
背反スル共治權ニ至ルマテニ擴張スヘカズ之ヲ  
詳言スレハ議院ハ主權者ノ憲法上ノ統治權ヲ  
施行スルニ必要ナル支出ヲ其自由ナル承諾ヲ  
以テ左右シ其權ノ施行ニ關スル最高ノ裁決ヲ  
ナスノ權ヲ有スヘカラズ

議院ノ如シ無限ノ豫算議決權ハ少クモ獨逸憲  
法学ニ於テ是認セサル所ナリ(マイエニ氏國  
法論第二百四條第一項)然レモ豫算議決權ニ關

ニテ為シ得ヘキ制限ヲ論スルニ當テ未タ一定ノ説アラズ

法律上確定シタル支出即法律上ノ規定ニ基ク  
所ノ支出ハ法律上ノ收入ニ於ケルカ如ク之ヲ  
拒否スヘカシサルコトハ一般ニ是認スル所ナ  
リ(マイエル氏第二百五條)

法律上確定セサル支出ハ必ス議院ノ承諾ヲ得  
ルヲ要スルトノ「マイエル氏」ノ説ニ至テハ正當  
ナリト謂フヲ得ズ少クモ巴威尔ニ於テハ一切  
ノ必要ナル支出ハ之ヲ拒否スルヲ得ズトノ原

則ツリ而シテ「マイエル氏」巴威尔國法論第一百

十條ニ於テハ法律上及實際上ノ必要ヲ區別  
シ得ズトノ説ヲナセリ固ヨリ法律上及實

際ノ必要ヲ區別スルモ大ナル効用アルニ非ズ何

トナシハ議院ニ於テ或ル支出或ハ其額ノ實際  
上ノ必要ヲ認メサルニ於テハ政府ハ其必要ト  
認ムル自己ノ意見ヲ貫徹スルノ方便ヲ有セズ  
然レ凡是レ尚幾カ議院ヲ制限スルニ足ル千  
八百四十三年ノ巴威爾憲法協議書ノ主意ニ南  
シテハ予ノ既ニ陳述セシ所ナリ

又巴威尔ニ於テハ經常ノ必要ヲ一タヒ認メタ  
ル支出ヲ他日隨意ニ異議スルヲ得ズトノ原則  
アリ(サイデル氏)巴威尔國法論第二卷第二百六十葉  
索遊「アルテンブル」ニ憲法第二百三條「オルデン  
ブル」ニ憲法第九十二條ニ於テハ加之經常費  
タルノ承諾ヲ受ケタル歟ハ政府ノ承諾ヲ得  
ニ非サレハ永ク之ヲ減スルヲ得サルノ明文  
ヲ掲ク是レ固ヨリ他ノ憲法ニ於テハ多ク明言  
セサル所ナレモ予ハ實際ニ於テハ均ク是認セ  
ラレタルモノナリト信スル所ニシテ又大ナル

制限ナリ

由此觀之政府ト議院ノ間ノ豫算爭議ハ新支出  
或ハ法律上其額ヲ規定セサル支出ノ増額ニ關シ  
テ生スヘキノニ今ヤ議院ノ豫算議決ハ支出ノ  
適法ヲ審査スルノニナラズ又官金ノ無益ナル  
費用ヲ防クニ在ルモノナレハ此關係ニ於テモ  
亦議院ニ審査權ヲ予フヘキヤ明カナリ然レモ  
議院ニシテ全部ノ拒否ニ均キ節減ヲ議決スル  
トキハ如何ナル方法ヲ以テ處理スヘキヤノ問ヲ  
生ス即之ニ關スル方法ハ左ノ如シ

第一、議院ハ法律上獨リ收入承諾權ヲ有シ豫  
算各部類ニ於ケル收入ヲ全体ニ於テ之ヲ承諾  
スヘキモ各部類ノ爲メ全體ニ於テ承諾シヨ  
費用及額ノ分配ハ政府ノ意見ニ任カスヘシト  
定ムルヲ得ヘシ是レコアラウレシユツ井上憲法第  
百八十五條及千八百四十三年ノ巴威爾憲法協  
議書ニ明言セル所ニシテ其結果ハ政府ハ其承  
諾ヲ受ケタル部類ノ金額内ニ於テ任意ニ各個  
ノ支出ヲ確定スルヲ得ルニ在リ

第二、議院ニ於テ全部ノ拒否ト見做スヘキ節

議ヲナシタルトキハ是レ憲法ニ背反スル決議  
ナリト謂フヲ得ヘシ何トナレハ議院ハ皇帝ノ  
憲法上ノ統治權ニ基ク所ノ支出ヲ拒否スヘカラ  
サレハナリ然レモ憲法ニ背反スル決議ハ政府  
ヲ束縛スルノ効力ナキカ故ニ政府ハ如此場合  
ニ於テハ獨斷決行スルヲ得ヘシ

第三、予ハ如此專斷ニ贊成ヲ表スルモノニ非ズ  
予ガ憲法草案ニ據レハ政府ト議院ノ間ニ協議  
調ハサルトキハ主權者ハ内閣ノ責任ヲ以テ之ヲ  
裁決スヘキナリ即此場合ニ於テハ内閣更ニ之

ヲ會議ニ遂ニ皇帝ノ裁可ヲ受ク可キナリ元來  
主權者ノ上ニ最高ノ裁決權ヲ有スル者ナキカ故  
ニ他ノ方法ハ殆ト之ヲ發見シ難キ所ナリ若シ  
又法律上ノ問題ヲ最上法院ニ任シ純粹ノ金錢  
及要費上ノ問題ヲ參議院(若シ之アルニ於テハ)  
ノ裁決或ハ少クモ會議ニ付シ或ハ又之ヲ會計  
検査院ニ任スルトキハ猶一層寬大ナルヲ得ヘ  
シ然レ氏是レ政事上弊害アルヲ免レズ何ナ  
レハ然ルトキ内閣ハ幾分カ參議院又ハ會計  
検査院ノ下ニ立ツニ至リ又他ノ一方ニ於テ

ハ此諸官廳ハ内閣ヨリ設立セラレタルモノナ  
ルカ故ニ内閣ニ依テ左右セラレ且其裁決ハ政  
事上ノ關係ニ於テ全國ニ満足ヲ与フヘキ獨立  
ノモノニ非ズト謂フヲ得ヘケレハナリ  
第四、又議院ト共ニ法律或ハ勅令ヲ以テ支出  
豫算ノ全部或ハ其重要ナル部分ノ定額ヲ設ケ  
豫算確定ノ根據トナスヲ得ヘシ  
即獨逸憲法第六十二條ニ於テハ總軍隊ノ支出  
ニ充ツル為ニ百二十五「タ」ノ定額ヲ設ケ  
又帝國軍隊ノ法律上ノ編制ニ根據スヘシト

定メタル也キ又其第五條ニ於テ現行ノ制度ヲ維持セント欲スル皇帝ノ勅旨ニ決スヘシト定ムルカ如キ是レナリ

「ガルデンブルヒ憲法第百九十二條ニ於テ軍制及司法行政官ノ俸給及事務費ノ經常費ハ規則ヲ以テ確定シ政府又ハ國會ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ之ヲ變更スルヲ得ズト定メタルカ如キ是レナリ例ヘハ俸給ノ如キハ此規定ニ基キ官吏ノ等級ニ準シ永遠ニ効力アル規則ヲ以テ確定シタリ而シテ政府ハ議院ニ於テ俸給ノ増

額ヲ承諾スルマデハ此規則ニ束縛セララル、モ必要ナル官吏ノ負數及種類ヲ定ムルハ政府ノ權内ニ在リ何トナレハ政府ハ官吏ニ依テ統治ヲナスヘキモノナレハナリ

如此ノ常設ノ定額ハ國ヨリ警害ナキニ非ズ蓋政府ハ何レノ場合ニ於テモ可成多額ノ定額ヲ設ケントスルカ故ニ容易ニ全行政ノ為、巨大ノ費用ヲ要スルモノナレハナリ  
今ヤ以上掲ケタル豫算議稅權ノ制限或ハ其他發見シ得ル制限ヲ憲法ニ掲クルモ予ハ之ニ同



意セサルニ非ズ到底法律上ノ收入外ニ非サル  
豫算問題ニ於テハ政府ニ其裁決權ヲ歸スヘキ  
結局ヲ生スルニ過キサルベシ何トナレハ政府  
ハ施政權ヲ掌握スルカ故ニ其職ヲ辭スルヨ欲  
セサルニ於テハ國家ノ利益ニ適スル統治ノ継  
續ヲ其自信ニ反シテ中止スルコト能ハサレナリ

明治二十年六月十八日

ハロエスレル様

問

豫算ヲ製スルニ科目ヲ分ツノ方法ハ或國ニ於  
テハナルヘク之ヲ細密ニ區分シテ議院ノ議ニ  
付シ以テ輿論ノ満足ヲ取ルヲ務メタリ(白耳  
義ノ如シ)  
既ニ細科目ヲ以テ議院ノ議ヲ經タルトキハ其  
行政官ニ於テ便宜ニ議決ノ科目ヲ流用スルコ  
ト許サレハ固ヨリ當然ナルヘシ  
然ルニ此ノ科目議決ノ方法ハ行政事務ノ未來ノ  
活動ヲ制縛シ行政長官ノ責任ヲ薄カラシメ且豫

備費ヲ設クルノ必要ヲ生スルヲ以テ其發失ヲ  
見ルニ至ル故ニ佛國ノキエル氏ハ其政府ノ委  
負タルノ時ニ議院ノ演說ニ於テ千八百二十七  
年王國ノ勅令即チ各着シ以テ豫算外科トスル  
ノ方法ヲ稱賛セリ

此問題ニ付適當ノ方法ハ如何貴下ノ意見ヲ示  
サレシトテ請フ

明治二十年六月五日

井上

ロスレル君貴下

答

豫算議決權ハ支出承諾ノ權ニシテ議院ニ於テ  
先ツ一切ノ支出ヲ確定シタル後始メテ其支辨  
ニ必要ナル收入ヲ承諾スヘシトノ論旨ニ據ル  
トキハ白耳義ニ於ケル如ク政府ハ豫算ノ細目  
ニ於テ確定シタル支出ヲ精密ニ遵守スヘク其  
支辨ニ充ツル收入ノ有無ニ拘ラズ之ニ違ハシ  
トスルハ決シテ大臣ノ權ニ在ラサルハ當然ナリ  
此原則ニ據ルトキハ本然ノ統治權ハ暗ニ議院  
ノ手ニ存スルモノト謂フヘシ

之ニ反シ豫算議決権ハ一ニ收入承諾ノ権ニシテ支出ヲ審査スルハ其承諾スレキ總收入ノ額ヲ判定スル爲メ間接ノ審査ニ止マルトスルトキハ政府ハ支出豫算ノ細目ニ依テ束縛セラルルコトオカサルヘシ其承諾ヲ受ケタル收入ノ總額内ニ超エサルトキハ縱令議院ニ反對スルモ尙其國法上ノ義務ヲ履行スルヲ得ヘシ此レ往時ノ主義ナリト雖近來議院ノ勢力次第ニ擴張シ來リテ大ニ行政權ヲ制限スルニ至リタリ佛國ニ於テ千八百七年以來各省毎ニ豫算ヲ承諾シ千八百二十七年ニ於テハ各省ノ各部毎ニ

之ヲ承諾シ千八百三十二年ニ至リテハ各部内更ニ各款毎ニ之ヲ承諾スルニ至レリ其後拿破翁弟三世ノ時代ニ於テモ同一ノ進歩ヲナシタレ氏議院ハ參議院ノ承諾ヲ得ルニ非ザレハ各省豫算又ハ各部豫算ノ總額ニ削減ヲナスコトヲ得サラシメシハ王政時代ニ於テ嘗テ見サリレ所ナリ英國ニ於テハ豫算流用ノ事ヲ精密ニ論スルコトナク少クモ全ク其省ヲ異ニスル陸海軍ノ豫算間ニ於テ流用ヲ許シタルカ如シ其他ノ豫算ニ關

シテハ予ハ詳細ノ規定ヲ知ラズト雖、要スルニ  
英國ニ於テ重スル所ハ議院ノ承諾ニタル收入  
外ノ支出ヲナサザルニ在リ歐洲大陸ノ議院制  
ニ固有スルカ如キ各個支出ニ對スル煩瑣ナル  
異議ハ英國ニ於テ之アルヲ見ズ

普國及獨逸國ニ於テハ政府ハ議院ニ對シ豫算  
ニ明掲シタル總額ヲ遵守スヘキ義務ヲ有シ  
豫算ノ科目ハ豫算法律ニ於テ流用權ヲ明掲シ  
タル場合ヲ除ク外流用權ヲ行フコトナク之ヲ  
守ルヘキナリ抑、豫算ハ各省毎ニ之ヲ敷款(俸給

及其他ノ人負上ノ支出、物件上ノ支出)ニ分ツヲ  
例トスレト殊ニ一省ヲ數行政部ニ區別シタル  
トキハ項ヲ以テ尚之ヲ細カスルコトナキニ非  
ズ而シテ政府ニ於テ遵守スヘキモノハ議院ノ  
各別ノ決議ヲナシテ豫算ニ其旨ヲ附記シタル  
科目ナルカ故ニ獨逸國ニ於テハ通例豫算ノ各  
款名項内ノ細目ニ於テ流用ヲナスコトヲ得即  
各款項内ニ於テ項ノ支出ヲ増ストキハ之ニ準  
シテシノ支出ヲ減スルヲ得ヘキナリ然レト如  
此流用ハ會計検査院ニ之ヲ証明スヘキヲ常ト

此方法ハ予ニ於テ尤中ヲ執リタルモノトシテ賛  
成スル所ナリ即議院ニ予フルニ各個支出ニ関  
シ政府ヲ後見スルノ權ヲ以テセズト雖、多少各  
省ノ權カヲ制束スルモノナリ若シ豫算ヲ唯各  
省毎ニ承諾スルトキハ大臣ハ必要ナル支出ヲ  
ナサズシテ為ニ或ル行政事務ヲ妨害シ之ニ反  
シ無益或ハ不急ノ支出ヲナスノ危險ナルモノ  
ニシテ其結果タルヤ支出ヲ増加シ官舎ヲ浪費  
スルニ至ルヘシ今此ニ一例ヲ舉ケンニ官有建  
物ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ為ニ後年ニ至テ之ヲ修

繕スルニ莫大ノ費用ヲ要スルニ至ルカ如キ是ナリ

千八百八十七年六月廿五日

ハロエスレル様

問

豫算ヲ製スルニ科目ヲ分ツノ方法ハ或國ニ於  
テハナルヘク之ヲ細密ニ區分シテ議院ノ議ニ  
付シ以テ輿論ノ満足ヲ取ルヲ務メタリ(白耳  
義ノ如シ)

既ニ細科目ヲ以テ議院ノ議ヲ控タルトキハ其  
行政官ニ於テ便宜ニ議決ノ科目ヲ流用スルヲ  
許ササルハ固ヨリ当然ナルヘシ

然ルニ此科目議決ノ方法ハ行政事務ノ未來ノ  
活動ヲ制縛シ行政長官ノ責任ヲ薄カラシメ且

豫備費ヲ設クルノ必要ヲ生スルヲ以テ其弊失  
ヲ見ルニ至ルヘキカ故ニ佛國ノ千五八氏ハ其  
政府委員タルノ時ニ議院ノ演説ニ於テ千八百  
二十七年王國ノ勅令即チ各省ヲ以テ豫算ノ分  
科トスルノ方法ヲ稱賛セリ  
此向題ニ付適当ノ方法ハ如何貴下ノ意見ヲ示サ  
レニテ請フ

明治二十年六月五日

モツセ君貴下

モツセ氏答

豫算議決權ノ問ニ關スル意見

豫算ノ細目ニ關スル貴問ハ豫算議決權ノ全体  
ニ涉ルニ非サレハ論究スルヲ得ザルカ故ニ可  
成簡單ニ此權ト關涉シテ貴問ニ對ヘント欲ス  
第一、經濟ノ第一要務ハ收入支出ノ間ニ平均  
ヲ保タシムルニ在リ而シテ此目的ハ大ナル經  
濟殊ニ國家ノ經濟ニ於テハ定期ノ豫算ヲ立ル  
ニ非サレハ之ヲ達スルコト能ハズ故ニ專制ノ  
國ニ於テモ既ニ完全ナル豫算ヲ作り可成之ヲ

守ルノ計畫ナルヲ要ニタリ普國ハ專制ノ國家  
タリシ時ニ於テ既ニ率先ニテ此財政術ノ需要  
ヲ充ダシタルハ世人ノ知ル所ナリ日本ニ於テ  
モ此事ニ関シテ既ニ稱賛スヘキノ計畫ヲナセ  
リ  
然レモ此急務ヲ正當ニ履行シ可成收入支出ヲ  
適切便宜ニ整理シ殊ニ之ヲ節約シ又國家ノ  
信用ヲ鞏固ニセントスル為ニハ國會ノ憲法上  
ノ參與ヲ待テ始テ大ナル保証ヲ見ルコトヲ得  
ルハ疑フヘカラサルナリ又政事上ノ關係ニ於

テハ國會ノ憲法上ノ參與ニ就テ更ニ重要ノ利  
益アリ即人民ハ政府ノ專縦ヲ防止シタル感覺  
ヲ生シ負担及其費用ノ目的ヲ確定スルノ際  
並ニ此費用ヲ監督スルノ際代人ヲ以テ自ラ參  
與スルコトヲ得其賦課セラレタル負担ハ最必  
要ナルモノニシテ專國家ノ目的即全体ノ利益  
トナル目的ノ為ニ費用セララル、モノナリトノ  
信任ヲ得ル是レナリ  
然レモ他ノ一方ヨリ之ヲ見ルトキハ上陳ノ利  
益ハ議院ニシテ豫美ヲ激決スルノ際國家ノ



真正ノ利益ヲ重ニシテ黨派ノ利益ノ為ニ牽制セ  
ラル。ゴトナキニ非サレハ存立スルコトヲ得ヘ  
カラズ而シテ議院ノ洪大ナル豫算議決權ハ行  
政ヲ左右スルノ権力ナルハ明カナリ國民自治  
ノ制ニ養成セラレ公共ノ需要ヲ了解シ又統治  
ヲナスノ資格ヲ有スル黨派ヲ組織シ議院ノ多  
數ヲ以テ内閣ヲ組織スル原則ヲ行フノ國ニ在  
テハ議院ニ洪大ナル豫算議決權ヲ与フルモ國  
家ノ利益ヲ害セサルヘシト雖此要件ヲ存セザ  
ル國ニ於テハ如此權利ハ勢必ス爭議ヲ生スル

ルニ至ルヘク而シテ統治權ノ愈強大ナルニ從  
テ爭議愈烈ナルヲ見ルヘシ此等ノ要件ハ日本  
ニ於テ之アルヲ見ズ且方ニ強大ナル政府ヲル  
ヲ必要トスルノ時ニ當レリ加フルニ國民ハ統  
治ノ資格アル大黨派ヲ組織スルヲカメズシテ  
好ニテ小黨派ヲ組織スルノ傾向アリ故ニ予ハ  
此事ニ關シテ日本ハ日耳曼人種國ノ例ニ倣フ  
ヘシト信ス即英國及獨逸國ハ漸次歩ヲ進メテ  
現今ノ開明ニ至リタルモノニシテ日本ニ於テ  
モ亦時々逐フテ此國會ノ權利ヲ擴張スルニ至

ルヘク俄ニ立憲國カ南明ニ依テ得タル所ノ最  
上級ヲ模倣スヘカラズ此諸國カ一般ノ機關的  
ノ進歩ニ從ヒ專制國ヨリ立憲國ニ變遷スルノ  
際如何ナル方法ヲ施ミタルヤヲ觀察スヘキナ  
リ予カ左ニ提出スル所ノ意見ハ此主義ニ依ルモノ  
ナリ

第二、總テ豫算議決ノ起源ハ何レノ國ニ於テ  
モ收入ノ承諾ニ在リ日本ニ於テモ國會ニ此權  
ヲ予フルニ弊害ヲルコトナシ然レモ予ハ豫算

議決權ヲ新稅ノミニ限リ凡テ收入ハ毎年承諾  
ヲ要ストイヘル白耳義憲法ノ原則ヲ取ルベカラ  
ズト信ス左ニ掲ル所ノ成文ハ此主義ニ適フヘ  
シ

議院ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ新稅ヲ設ケ又  
ハ現行ノ租稅ヲ増額若ハ變更スルコトヲ得  
ズ

此原則ハ普國憲法第百九條ノ意義ニ同シト雖  
普國憲法ノ成文ハ元來獨リ新旧變遷ノ効用ヲ  
有スルコトヲ知ラシムルノ感覺ナキニ非ズ故

ニ予ハ巴威ル憲法第七章第三條ノ成文ヲ優  
レリトシ其承諾シタル租税ハ繼續シテ之ヲ徵  
收スルノ原則ヲ以テ間税ニ止メズシテ之ヲ直  
税ニ及ボスヲ正当ナリトス  
若シ此主義ニシテ果シテ贊成ヲ得ルトキハ白  
耳義憲法ヨリ普國憲法(第九十九條)ニ傳授シ  
タル原則ハ之ヲ避クルヲ可トス數多ノ有名ナ  
ル國法學者ノ説ニ政府ハ唯、豫算法律ニ依テ  
現行法ノ租税ヲ徵收スル法律上權利ヲ有シ其  
現行法ハ縱令永遠ニ効力ヲ有スルモノナルニ

モセヨ毎年發スル所ノ施行法即豫算ニ依ルニ  
非サレハ之ヲ施行スルヲ得サルカ故ニ第九十  
九條ニ於テ要スル施行法ノ成立セサルトキ又ハ  
成立セサルノ間政府ハ永久ノ法律ニ基ク所ノ  
租税ヨリ生スル收入ヲモ徵收スルノ權ヲ有セ  
バトスルハ即此白耳義ノ原則ニ由來スルモノ  
ナリ此説ハ獨リ黨派ノ主義ニ止マラズ守旧主  
義ヲ執ル所ノ法學者モ亦第九十九條ノ法律上  
理由ニ依テ主張スル所ナリ予ハ「ゲナイヌ」氏  
ノ言ノ如ク果シテ此主義ハ適當ナルヤ否ヤハ

此ニ之ヲ講究スルヲ欲セズト雖第百九條ノ主  
義ヲ執ラントスルトキハ第九十九條ノ如キ教  
多ノ國ノ憲法ニ掲ケタル所ノ規定ヲ存ケテ此  
兩様ノ關係ヲ引起ル事議ヲ豫防スヘキハ上ニ陳  
ヘタル所ノ如シ  
其他議院ニ租稅承諾權ヲ与フルハ此權ヲ以テ  
信任諾否ノ手段トナシ或ハ政府ノ為ニ強テ承  
諾ヲササシムルノ方法ヲラシムルニ非ズ此權  
アルカ為議院同時ニ憲法上ノ義務ヲ負担ス  
ヘキカ爲ナルコトヲ憲法ニ明言スルヲ可トス

故ニ左ニ掲クル二箇ノ成文ヲ採用スヘシ  
議院ハ經常及非常ノ國費ニ充ツル爲必要ナ  
ル收入ヲ承諾スルノ義務ヲ有ス(索隱憲法第  
九十七條千八百三十二年十月十二日ノゾラウ  
ニシユワサヒ)憲法第百七十三條  
租稅ノ承諾ニハ其租稅ノ費出ト直接ノ關係  
ヲ有セザル約束ヲ附帶セシムヘカラズ(巴威  
爾憲法第七章第九條瓦敦堡第百十三條索  
遜第百二條「セルビ」第六十四條)  
第一ノ原則ハ其必要ナリトノ語ニ就キ直ニ事議

ヲ生スヘキカ故ニ嚴格ナル法則ヨリハ寧ロ政  
事上ノ主義ヲ記載ニタルモノタルハ予モ亦之  
ヲ認ムル所ナリ然レモ此原則ヲ憲法ニ掲載シ  
テ以テ其主旨ヲ明カニシ且佛國ニ淵源シテ一  
般ニ敷及シタル所ノ議院ノ隨意トセム單一ノ  
豫算議決權ノ主義ニ對シ之ヲ防止スルヲカム  
ルヲ以テ便宜ナリトスヘシ

此ニ反シ第二ノ原則ハ直接ナル實際上ノ効用  
ヲ有シ英國法ニ於テモ「テイキンク」ビルヲ以テ  
認メタル禁止ヲ包含ス又千八百六十九年ノ「セ」

ルビイ憲法第六十四條ニ於テモ亦此レト同一  
ノ禁止アリ

第三、左ニ列記スル事件ハ國會ノ承諾ヲ受ク  
ヘシトノ規定ヲ設クルハ弊害ナキノミナラズ  
又國家ノ利益タルヘシ

- (伊) 國債ノ興スルコト
- (呂) 國家財産ヲ賣却スルコト
- (取) 保證ヲ負擔スルコト

然レモ羅馬人種ノ憲法及普國憲法ニ於テ見ル  
所ノ法律ヲ要ストノ語ヲ避ケガルヘカニハ何ト

ナレバ此事タル行政上ノ處分ニシテ法則ノ類  
ニ非ス而シテ此語ニ由テ意裁錯誤ヲ來スルモ  
ノナレハナリ故ニ此處分ハ兩院ノ承諾ヲ受ル  
ニ非サレハ之ヲナスコトヲ得ベカラズトノ文  
ヲ以テ之ヲ掲クルヲ可ナリトス  
急迫ノ場合ノ為ニハ千八百五十一年五月五  
日ノ改正憲法第百五條及セルビイ憲法第  
六十六條ニ擬シタル規定ヲ設ルヲ可トスヘシ  
第四 豫算議決權ノ尤困難ナル問題ハ支出ノ  
確定是レナリ元來法律上政府ノ權内ニ在ル收

入ヲ以テ國務ヲ處理スルニ必要ナル費途ニ充  
ツルハ施政權ノ務ナリ往昔英國法ニ據ルモ中  
獨逸諸國ノ憲法ニ從フモ皆然ラサルハナシ  
英國ニ於テハ第十七世期ノ末葉ニ於テ殆メテ  
議院ハ所謂「アツプロ」リアチオニスウセル一  
定ノ費途ニ充ツヘキ條款ヲ以テ租稅承諾ノ際  
ニ行政ヲ制限セシトシタリ中獨逸諸國ニ於テ  
ハ議院ニ歸スル收入承諾ヲ議決スルニ當テ當  
然其必要ナルヤ否ヲ審査スルノ点ヨリ見レハ  
議院ハ間接ニ支出上ニ勢力カヲ有スルカ如シト

雖巴威爾憲法第七章第三條乃至第八條尾敦堡憲法第百十一條第百十二條千八百十八年ノ巴丁憲法第五十三條以下ニ據ルニ嘗テ白耳義佛國ニ倣ヒ豫算議決權ノ範圍ニ於テ直接ニ支出承諾權ヲ議院ニ予ヘタルコトナシ予ハ第一ニ陳ヘタル旨ヲ執ル者ナレハ當分如此支出承諾權ヲ議院ニ予ヘサルノ意見ヲ提出スヘシ人或ハ予カ説ヲ駁シテ曰ニ彼獨逸諸國ノ憲法ニ據レハ豫算モ亦議院ニ提出スヘシト然レモ彼憲法ニ明言セル如ク(巴威爾憲法

第七章ニ於テ「故ニナル語ヲ用井尾敦堡憲法第百十一條ニ於テ」為ニナル語ヲ用井タリ此レ乃收入ノ承諾ニ関ル政府ノ發議ヲ証明スル為ニスル者ニシテ豫算全体ニ関シテ議院ノ議決ヲ取ル為ニハ非サルナリ

此ニ及シ豫算法ヲ以テ確定シタル支出ノミヲ  
政府ニ許ス所ノ憲法ハ及對ノ主義ヲ執ルコト  
世ノ普ク知ル所ナリ(白耳義才百十五條荷蘭才  
百十九條才百二十條盧克山堡憲法才百四條桂  
逸帝國才六十九條普國才九十九條西班牙才八  
十五條葡萄牙才百三十六條乃至才百三十八條  
千八百五十二年ノ同國法律才十二條才十三條  
暹馬才四十九條ルメニ也才百十三條希臘才六  
十條等)

此豫算議決權ノ發ハ世人ノ知ル所ナリ今此權



ヲ制限スルノ方法ヲ求ムルニ左ノ如シ  
(伊) 議院ノ承諾ハ單一ナル有益ノ支出ニ於テ  
之ヲルヲ要スルニ必要ノ支出ニ於テハ然ラス  
然レモ此區別ハ猶價値ナキモノナリ何トナレ  
ハ此レカ爲堅確ナル境界ナケレハナリ  
(呂) 英國ノ例ニ倣ヒ(ゴ) ソリデレット(ト)  
支出ノ不動部分ヲ豫算中ヨリ分離シ其有動部  
分ノミニニ關シ毎年議院ノ承諾ヲ受クヘシ此考  
案ハ專「ス」タイン氏ニ出タルモノニシテ氏ハ國  
家豫算ト(不動部分)政府豫算(有動部分)トノ區別

ヲナサント欲コトナシト「ラー」バン「ト」シユルケ  
エ「」ワグ子ニ及其他數多有名ナル独逸國法學者  
ノ贊成ヲ受ケタリ然レモ此如何ナル支出ヲ不動  
部分トスヘキヤノ詳細ノ説ニ至リテハ未タ一  
轍ナラス但國家ノ法律上ノ支出(國債帝室經費  
多少異論アル所ノ官吏ノ俸給恩給法律上團結  
体及公院ニ于テ補助金等)ノ不動部分ニ屬ス  
ルコトハ諸家ノ説既ニ一途ニ歸シタリ又他ノ  
學者ハ其他大体ニ於テ疑フヘカラサル國家機  
關ノ制度ニ必要ナル金額ヲモ不動部分ニ算入

シ毎年承諾ヲ受テハキモノハ只、此支出ノ増額  
ト及他ノ國家ノ支出ニ限ルヘシトスル者アリ  
但シ此範圍ニ於ケル所謂經常豫算ハ従前實際  
ニ之ヲ施行シタルノ國アルコトナシ此ニ及ス  
ル困難ナル弊害論ハ普國憲法改革論ヲ百九十  
葉乃至百九十二葉ニ於テ切論シタルヲ以テ  
此ニハ之ヲ引證スルヲ以テ是レソトス然レモ  
政府ノ法律上ノ義務ヲシテ定期ノ承諾ヲ受ケ  
シメサルハ正當ナル考察ニシテ年末議院ノ進  
歩シタル國ニ於テハ予ハ此防障ヲ以テ實際ニ

豫算議決權ノ濫發ヲ制止スルニ十分ナリト認  
ム  
然レモ他ノ一方ニ於テ豫算ノ爭議ハ通例法律  
上ノ義務ニ關スルモノニ非サルコトヲ看過ス  
ヘカラス此考察ノ價值タルハ政府ハ豫算ノ成  
立セザル場合ニ於テモ其支出ヲナスニ妨ケナ  
キカ故ニ國家ハ豫算ノ拒否ニ依テ其命運ヲ危  
クナルコトナキニ在リ而シテ自由論者ニ於テ  
モ亦此考察ニ同意ヲ表スル者多シ何トナレハ  
豫算ノ承諾ハ此レニ依テ始メテ議院ノ実用ス

ルヲ得ル權利トナレハナリ又英國ノ例ヲ以テ  
明ナルカ如ク議院ノ地位ニ依テ衰弱スル  
ニ非スシテ却テ鞏固ナルニ至ルハシ  
故ニ予ハ第一ニ掲ケタル理由ニ依リ此制限モ  
亦日本ノ為ニ十分ナリトスルヲ得ル

(波) 独乙帝國憲法ニ其第六十二條ニ於テ軍制  
支出豫算ヲ確定スルノ際軍隊ノ法律上ノ組織  
ニ準據スル原則ヲ掲ク若シ此原則ヲ擴張シテ  
法律上一切ノ組織ニ及ホストキハ豫算議決權  
ヲ正当ニ施行スル為有益ナル手段ヲ得ヌレ

ノナリ予ハ國ヨリ此レニ依ルモ組織ノ区域内  
ニ於テ政府ト議院ノ間ノ一切ノ爭議ヲ除去ス  
ハシト謂フニ非ス何トナレハ現行ノ組織ヲ雖  
持スル為如何ナル費用ヲ要スルヤ否ニ關シテ  
其說ヲ異ニシ得レハナリ然レ日本ニ於テハ從  
來法律ヲ以テ組織ヲ定メタルコト甚メ少ナシ  
予ハ軍隊及裁判所ノ編制ノ如キハ憲法施行前  
ニ必法律ヲ以テ制定セラレシヲ望ム茲ニ國  
王ニ歸スル組織權ニ對シ豫算議決權ニ如何ナ  
ル地位ヲ占ムルヤニ問題アリ予ノ所見ニ據レ

ハ千八百六十九年二月三十日ニ「オイレンブルヒ  
伯ヲ以テ普國政府カ明言シタル主義ヲ正當ナ  
リトス其主義トハ即チ行政廳ノ組織ニシテ法  
律ニ基カサルモノハ勅令ヲ以テ制定スルヲ得  
ヘシト皇官廳ノ新設又ハ改革ノ為ニ政府ニ於  
テ全國ヨリ金額ヲ請求スルトキハ必ス國會ノ  
承認ヲ要スト謂ヒ是レナリ君主ハ所謂組織權  
ヲ有スルカ故ニ其組織ノ為ニ要ナル金額ハ議  
院ニ於テ必之ヲ承認スヘシ又ハ一般ニ議院ノ  
承認ヲ要セザルヘシトノ推斷ニ至リテハ予ハ

カイデル(巴威爾憲法論)及多數ノ法ニ國法學者  
ト共ニ議院ノ權利ト一致セザルモノト認ムル  
ハ既ニ才ニ於テ陳ハタルカ如シ之ヲ要スル  
ニ國君ハ承認ヲ受ケタル金額内ニ於テハ其組  
織權ノ施行ヲ制限セラル、コトナシト雖此範  
用外ニ於テハ租稅ノ承認ヲ求ムヘシ若シ此主  
義ヲ採用セラルトキハ左ノ原則ニ基ク所ノ成  
文ヲ設クヘシ

豫算ヲ確定スルノ際ニハ法律又ハ法律上効  
カアル所ノ勅令ニ基ク陸海軍及官廳ノ組織

ヲ以テ基礎トスヘシ

然レトモ此原則モ亦統治權ノ牽制ニ對スル防  
障トナルニ未タ十分ナラス何トナレハ既ニ  
陳ハタル如ク國會ハ此原則上必要ナル支出ノ  
額ニ關シ政府ト其意見ヲ異ニスルコトアルノ  
ミナラス又政府ハ法律上ノ義務(吾ノ所ニ陳ハ  
タルカ如シ)及上陳ノ組織ニ基ク支出外高莫大  
ノ費用ヲ要スルモノ數多アリ此レカ為ニ國會  
ノ自由ナル承諾ヲ受クヘケレハナリ

(仁)

索遜憲法第百三條千八百五十一年五月五

日ノ索遜改定憲法第百五條第百五項ニ他ノ方法ヲ  
掲ク此憲法ニ據レハ兩院ノ一院ニ於テ少クモ  
三分ノ二以上否決シタルトキ始メテ其承諾ヲ  
拒ミタルモノト見做ス是レ政府ノ地位ニ於テ  
一層利益アルコト明カナリ抑ニ索遜憲法ハ凡テ  
他ノ法律案ニ關シテモ同一ノ規定ヲ掲クルカ  
故ニ(第九十二條)豫算承諾上ニ此主義ヲ及ホシ  
タルハ理ニ背クモノニ非ス然レトモ日本憲法  
ニ於テハ此主義ヲ執ラズシテ多數決ノ原則ヲ  
採用シタルカ故ニ豫算案ニ關シテハ三特ニ例

外ヲ設クルトキハ輿論ハ政府ヲ嫌忌シテ不服  
ヲ鳴ラスニ至ラン

(保) 然レトモ上ニ陳ヘタル考案ハ凡テ豫算ノ  
細別ニ伴隨スル流用(以テル)ノ禁ヨリ生ス  
ル困難ヲ避ケ得ルモノニ非ス此禁ハ二三ノ憲  
法ニ明言セル所ニシテ(白耳義才百十六條普國  
會計検査院法才十九條)論理上議院ノ支出承諾  
權ヨリ生スルモノナリ豫算全体ニシテ議院ノ  
承諾ヲ受レルヲ要スル國ニ於テハ流用ヲ以テ豫  
算超過ト見做シ國會ノ承認ヲ受クヘキハ固ヨ

リ論ヲ待タズ豫算ノ過度ナル細別ニ伴隨スル  
此原則ヨリ生スル弊害ニ關シテ「グナイニス」氏  
ハ其普通ニ行ハル所ノ法律及豫算ト題スル  
著書才百七十四頁以下ニ於テ適切ニ辨明シタ  
リ又予ニ示サレタル貴問ニ於テ既ニ簡明ニ陳  
ヘテレタル所ナリ此ニ重要ナル點ハ細目ノ程  
度ニ在リト雖從來曾テ之ヲ發見シタル者ナシ  
他ノ一方ヨリ見レハ議院ト政府ノ間ニ爭議ノ  
絶エサルハ即此問題ニ關スルモノニシテ豫算  
爭議ノ此点ヲ離レズ且立法ノ動搖已マサル佛

國ヲ以テ通例トナスヲ得ヘシ(マウルス「ブロック  
佛國行政字典中ノ豫算ト默スル簡明ナル章ヲ  
参看スルニ「カ」二百八十八丁カ四号カ五号カ  
二十号カ二十一号カ二十三号カ儲クヘシ)千八  
百二十七年九月一日ノ法律其後又千八百五十  
二年乃至千八百六十一年ノ法律ヲ發スル前ノ  
仏國ニ於ケル如ク各省部門ニ依テ豫算ヲ議決  
シ其豫算内ニ於テ國王或ハ皇帝ノ免許ヲ得或  
ハ其免許ヲ得スレテ無限ノ流用ヲ許スル固ヨ  
リ簡單ナルカ如シ然レトモ佛國ノ歴史ニ徴ス

スルニ此主義ハ勢必ス財政ノ弊失ヲ招キ且議  
院ニ予ハタル支出承諾權ト調和スルカヲサレ  
ノ矛盾ヲ生スルカ故ニ訴訟願許及軋轉ノ已ム  
時ナキニ至ル又他ノ一方ヨリ見レハ實用ニ適  
スル一定ノ經界ヲ發見シタルコト未タ曾テ之  
アラス千八百三十一年一月廿九日及千八百七  
十一年九月十六日ノ仏國法盧克山堡憲法カ百  
五條荷蘭憲法カ百二十一條普國會計検査院法  
カ十九條ニハ此經界ヲ定ムルコトナク又此  
問題ヲ論究シタル著述家(カイドル)ハ豫算及豫

算議決權ト題スル著書中三十九丁以下ニ於テ  
此問題ノ編述ヲ参看スヘシモ此経界ヲ發見  
スルコト能ハサルナリ大体ヨリ論スレハ中庸  
ヲ以テ正當ナルモトスト謂フヲ得ヘシトモ  
此關係ニ於テハ專議院ノ節度ニ一任スルノ外  
アルコトナシ是レ殊ニ英國及奇異ニモ佛國ニ  
於テハ独逸國ニ及シテ實際ニ行ハル、所ナリ  
但支出承諾權ヲ与ヘラレタル切釋ノ議院ニ向  
テ節度ヲ望ムハカラスルノ事况ハ予ヲシテ當  
分如此權利ヲ予ヘサルヲ可トスルノ說ヲ執ル

ニ至ラシムタリ  
若シ憲法ニ於テ此權利ヲ予ラルトキハ左ノ  
規程ヲ設クシテ可ナリトスヘシ  
豫算ハ款毎ニ議決ス  
款ハ國債ノ大ナル部類ヲ包括ス  
議院ノ承諾ヲ受ケスレテ流用ヲナスヲ得ル  
ハ陸海軍ノ行政部内ニ限リ其他ノ行政部ニ  
於テハ各款内ニ限ル  
其他ノ事ハ予ハ後述ノ進歩並特別ノ法律ニ一  
任スヘシト認ム



(邊) 其他備財政ニ關スルノ困難ニシテ兩院制  
 ヲリ重スル者アリ何トナレハ英國ニ於ケル如  
 ク上院ノ議決ヲシテ純然ノ方式ニ止マラシム  
 シテ陰ク外面限制ニ依テ豫算ヲ成立シ難カラ  
 シムレハナリ予ノ見ル所ハ兩院ノ意見互ニ異  
 ナル場合ニ於テハ其可否ノ數ヲ遵算スル憲法  
 ヲ贊成ス(舊數僅チ百八十一條也) 丁午八百十九  
 年ノ才六十一條瑞典才六十九條同國國會組織  
 法才六十五條)

(警)

尤困難ナル問題ハ豫算ノ議一致セズ或ハ

一定ノ期限内ニ其後一致セザル場合是ナリ數  
 多ノ國ノ憲法ハ此ノ場合ノ者一モ規定スル所  
 ナク豫算ニ依テ收入支出ヲ確定スルハ國家機  
 關ノ憲法上義務ナリトノ憲法上ノ規定ヲ以テ  
 是レリトセリ議院政治ヲ行フ國ニ於テハ通例  
 實ニ此規定ヲ以テ是レリトスルハ何トナレハ  
 議員ノ多數ハ其党中ヲリ出テタル内閣ニ向テ  
 必要ナル收入ヲ拒否スルコトナク或ハ議院ノ  
 解散若クハ内閣員ノ辭表ヲ以テ拒方ノ一致ヲ  
 圖テスレハナリ此事件ノ存セザル國殊ニ普國

例ヲ以テ明カナルカ如ク統治權ノ強大ナル  
國ニ於テハ豫算手續、場合ニ於テ如何ナル  
手段ヲ施スルハキヤノ同致アリ  
収入ニ關シテ意見ヲ陳ハシ、或ハ所ニ揚ケ  
タル普國制度ヲ行フノ國ニ於テハ一モ困難アリ  
ルコトナシ即永遠ノ法律ニ基テ租稅ニ其他ノ  
收入ト共ニ使令豫算成立セザルモ継続シテ之  
ヲ徵收スルハ其外ニ法律ニ基カスシテ豫算ノ  
ニ基キ或ハ臨時承諾シタル有勤租稅ニ限リ  
テ豫算ニ依テスルテ之ヲ徵收スルヲ得ズ日本

ニ於テハ現行ノ收入ヲ以テ當分政務ヲ継続ス  
ルニ十分ナルカ故ニ豫算不成立ノ時ノ為ニ豫  
防スルノ必要ナカルヘシ  
此ニ及シテ支出ニ關シ鄙見ヲ陳ハシニ或ハ党派  
及教多ノ法學者ノ說ニ於テハ凡ソ政府ハ豫算  
ナクシテハ支出ヲナスノ權ナキカ故ニ豫算ハ  
各種支出ノ法律上要件ナリト主張スレトモ又  
或ハ党派及多數ノ有名ナル獨逸國法學者(カ  
ハストシテリバンストシエルクエルト)ハ政  
府ハ豫算ナキトキト雖政務ヲ継続スル為必

要ナル支出ヲナス。權ヲ有シ唯其責任ニ變更ヲ  
生スルノミト主張セリ予ハ此國法學者ノ枝葉  
ニ涉ル異說ヲ茲ニ講究セズ又其主義ニシテ憲  
法ノ成文ト一致スルヤ否ヲモ審査スルヲ欲セ  
ズ世人ノ知ル如ク普國政府ハ憲法爭議ノ時代  
ニ於テ亦二ノ主義ヲ執リタレモ豫算ナキ行政  
ハ憲法ニ合ハサルカ故ニ遂ニ國會ニ向テ「イン  
デムニテ」トテ請求シタル所ナリ  
今ヤ日本ニ於テハ拙逸ノ國法主義ヨリハ佛國  
主義却テ廣ク流傳シタルカ故ニ既ニ國會ニ支

出承諾權ヲ予フルトキハ上陳亦一ノ主義即仏  
國主義ニ恐ルヘキ多數ノ同意者ヲ見ルハ必然  
ノ事ナリ故ニ憲法ニ於テ此ノ權ヲ議院ニ予ハ  
ントスルトキハ又豫算承諾ハ政務ヲ継続スル  
為國會ヨリ政府ニ予フル全權ノ意義ナリトス  
ル所ノ偏僻ノ主義ニ對シ憲法ヲ以テ之ヲ豫防  
セサルハカラス而シテ此豫防ハ豫算ニ關シテ  
政府ト國會ノ議ト一致セサル場合ニハ支出ノ  
為ニ如何ナル手段ヲ施スヘキヤヲ憲法ニ於テ  
十分明瞭ニ揚クルノ外良策ナカルヘシ

南独乙諸國ノ憲法巴威ル才七章才七条巴丁才  
六十二条瓦敦堡才百十四条)ニ此關係ニ於テ  
一七實際ニ適スル模範ヲ見ス此等ノ國ノ憲法  
ハ只一定ノ時間ニ於テ租税ノ繼續徵収ヲ許ス  
ノミ今吾國ノ制ヲ採ルニ於テハ上ニ陳ハタル  
如キ豫防手段ヲ必要トセサルハシ又索懸豫算  
議決權ニ關スル規定ノ如キハ政府ニ廣大十  
餘地ヲ予フルモノニシテ(憲法才百三条千八百  
五十年五月五日ノ改定憲法才五条千八百六  
十年十一月廿七日ノ法律才一条及才二条)專ク

收入ノ問題ニ著目シタルナリ千八百六十六年  
ノ山メニ「憲法才百十三条千八百六十九年ノ  
セルビ」憲法才六十五条及千八百七十六年ノ  
西班牙憲法才八十五条ハ一定ノ期限内ニ豫算  
ノ成立セサル場合ノ為家後ニ叶議シタル豫算  
ヲ繼續セシムルノ點ニ於テ採用スルハキ前例又  
リ然レトモ此等憲法ニ於テハ前年豫算ハ通例  
經常支出ニ關シテノニ適用スルヲ得レ其支  
出ノ増額ヲ必要トシ又家後ノ豫算ニ於テ豫期  
セサリシ國家ノ利益ノ為臨時ノ支出ヲ必要ト

スルノ場合ニ適セズ故ニ予ハ「ブライバント」氏ノ  
説及千八百五十年十二月十六日ノ普國內閣決  
議（シエルクエー國法才ニ卷才四百四十五丁）ニ倣  
ヒ左ノ規定ヲ提出セント欲ス

一期ノ為一定ノ期限内ニ豫算ノ叶議調ハサ  
ルトキハ政府ハ以前ノ豫算ニ掲ケタル經常  
行政ノ支出（オルジナリーリウム）ヲナスノ權ヲ有  
ス此支出ノ増額並臨時ノ需用ニ充ル支出（エ  
キストラオルジナリーレン）ハ其支拂ニ關ル法  
律上義務ノ存スルカ又ハ其支出ヲ猶豫スル

ニ於テハ行政ノ秩序ニ關シ若クハ其他重要  
ナル國家ノ利益ニ關スル危險ヲ生スルカ故  
ニ勅令ヲ以テ之ヲ確定シタルニ非サレハ之  
ヲナスコトヲ得ス

第五 以上論究シタル豫防手段ヲ施スニ於テ  
ハ議院ノ支出承認權ニ伴隨スル危險ノ一ヲ避  
クルヲ得ヘント蓋上陳ニ於テ既ニ明カナルカ  
如ク國權ノ着大ナル制限及爭議ノ淵源ハ猶依  
然トシテ存在ス故ニ予ハ後來ノ為日本ニ於テ  
如此權利ヲ予フハカラスト信ス然ルトキハ政

府ハ法律上現行ノ收入内ニ於テ全ク自由ニ支  
出ヲナスヲ得又君主ノ組織權及豫算科目ノ經  
界ニ關スル問題並豫算不成立ノ場合ノ為ノ豫  
防手段ハ其必要ヲ失ヒ政府ハ唯現行ノ收入ヲ  
増額スルヲ要スルトキニ於テノミ國會ノ承諾  
ニ模索セラシムルハキナリ予カ亦四ニ提出シタル  
考案ハ國會ニ支出承諾權ヲ予フル場合ノ為ニ  
設ケタルモノナリト知ルハ此主義ニ反對ス  
ル者アラハ之ニ對ハテ言ハント欲ス曰ク英國  
及他國ハ立憲制ニ變遷スル際國會ノ制限

アル權利ヲ以テ満足シ收入承諾權ハ後來ノ進  
歩ナル豫算議決權ノ起源ナリシト  
然レモ日本ハ整頓シタル豫算ノ制度ヲ備ヘ現  
今既ニ毎年豫算ヲ調製スルカ故ニ又其全体ニ  
於テ之ヲ國會ノ議ニ付シ國會ヲシテ收入支出  
ノ一切ノ管理ニ關スル意見及希望ヲ皇帝ニ奏  
上スルノ權ヲ有セシメ皇帝ハ國會ノ建議ヲ精  
密ニ審査スルノ明文ヲ憲法ニ掲クルヲ得ハシ  
但シ予ノ考案ニ依レハ議決ノ權ハ政府ニ於テ  
現行ノ租稅ヲ増額シ或ハ新稅ヲ興サンコトヲ

求ムルトキニ非サレハ之ヲ國會ニテテハカラ  
サルトナリ  
豫算ハ兩院ノ議ヲ經タル後勅令ヲ以テ確定シ  
法律ノ爲定メタル方式ニ依テ之ヲ發布スヘシ  
是レ一ハ政府ノ財政ニ必要ナル標準ヲ與ヘ一  
ハ過日提出シタル意見ニ從ヒ國會ニ洪大ナル  
參與權ヲ予フルニ於テ其財政監督ニ必要ナル標  
準ヲ予フル爲ナリ若シ豫算ノ外ニ支出セント  
スルトキハ必スヤ勅令ヲ以テ之ヲ許スヘキナ  
リ

既ニ過日論究シタル普通ノ原則ニ從ハハ豫算  
ヲ確定シ其踰越ヲ許可スル勅令ハ法律ノ束縛  
ヲ受クヘキカ故ニ憲法上國會ノ承諾ヲ要スル  
モノニ對シ專斷ヲ以テ決定スルヲ得サルハ固  
ヨリナリ此ノ收入承諾權ノ成文ヲ設クルハ困難  
ナルニ非ス且此レヨリ生スル所ノ制度ハ簡明  
ニシテ行ヒ易ク而シテ此ノ制度ノ日本現今ノ  
狀況ニ適スルコトハ予ノ信シテ疑ハサル所ナ  
リ

千八百八十七年六月二十日

ア、モ、ス、セ、拜

問

配分税ノ法ハ定分税ノ簡易良便ナルニ若カス  
 何トナレハ配分税ハ年々ノ決議ヲ以テ増減ス  
 ルヲ以テ一ニハ人民ノ財産上ノ義務ニ異動ヲ  
 生シ各個ノ家計上ノ豫算ヲ一定ナラシムルコ  
 トヲ妨害シニハ議院決議ノ後之ヲ縣ヨリ郡  
 郡ヨリ村ニ配分スルノ煩勞ニ因リ豫算議決ト  
 施行トノ間ニ時期ヲ遷延スルノ必要ヲ免レサ  
 ヲハナリ故ニ佛國ノ四直税ヲ以テ配分税トナ  
 シタレカ如キハ其國ノ經濟學者モ亦己ニ其不



便ヲ論スル者アリ我カ日本ニ於テハ從來配分  
税ノ法ナクシテ皆定分税ナリ但議院ヲ設クル  
後ハ年々歳出ノ多少ニ從テ又歳入ノ増減異  
動アルヲ要スルハ必然ナルヨリ新ニ幾分ノ  
配分税ヲ設クルコト必要ナルカ如シ此事ニ付  
責下ノ意見ヲ請フ

明治二十年六月六日

口卫スレル氏

モスセ氏

責下

答

ワグ子ル氏ハ租税ノ割ヲ地方自治及分権ニ基  
カシムルノ理由ヲ以テ専ラ配分税ヲ稱賛スレ  
氏又タ子ル氏ハ地稅ニ於テノミ配分法ヲ設ク  
ルヲ得ヘシトセリ何トナレハ其他ノ直稅ハ各  
個人ノ甚タ異種ナル所得ニ賦課スルモノナレ  
ハ一定額ヲ以テ上ヨリ下ニ向ヒ配分シ能ハハ  
ハナリ然レ氏佛國ニ於テハ地稅ノ外高動產  
稅ノ產稅窓牖稅ニ配分法ヲ用キ普國ニ於テハ  
又分頭稅ニ配分法ヲ用ユ予ノ知レ所ニ據レハ

英國ニ於テハ一モ配分税アルコトナシ  
財政上ヨリ論スルハ配分税ノ價值如何ニ關シ  
テハ常ニ疑アルヲ免レズ地方自治ハ定分税ニ  
在リテモ尚行ハルコトヲ得ハシ何トナレハ  
定分税ヲ賦課徴収スルノ際ル地方廳ハ納税義  
務者ト合シテ收税委員トナリ凡テ重要ナル事  
務ヲ執レハナリ之ニ及シ其徴収スルハキ總税額  
ヲ上ヨリ下ニ向テ配分セントスルニハ定分税  
ニ於ケル如ク各區及各納税義務者ノ納税資力  
ヲ後ニ調査スルニ非サレハ能ハサル所ナリ例

ハハ地稅ノ如キハ地稅簿ヲ標準トスルニ非サ  
レハ配分スルコト能ハサルモノニシテ之ヲ定  
分税トシテ徴収スルトキニモ亦標準トナルハ  
キナリ今時ノ經過ニ從ヒ地稅簿ニ異動ヲ生シ  
タルカ爲少額ノ租稅ヲ納タルモノアルトキハ  
之ニ代リテ他人ハ亦多額ノ稅ヲ納ムサルハカ  
ラ大之ニ及スル場合ニ於テモ亦同シ何トナレ  
ハ總税額ハ常ニ同一ニ止マラサルハカラサル  
モノナレハナリ故ニ配分税ハ固ヨリ財政上國  
家ノ爲ニ簡便ニシテ利益アリト雖各個人ハ之

カ爲ニ偏重ノ荷擔ヲ負ハサルハカラス予ハ定  
分税ハ收税原則ノ最チ一ナル納税資力ノ同一  
ナル標準ニ從フ所ノ比例ニ尤適當ナルモノト  
信ス既ニ上ニ使ハタル如ク定分税ハ亦行政ノ  
事務ヲ輕便簡捷ナラシムルモノト謂フヲ得ハ  
ク大体ニ於テ寛大公平ナルモノナリ  
國法上ヨリ論スレハ配分税ハ元來議院ニ於テ  
毎年新ニ政府ノ租税徵收ヲ承諾スルハキ點ニ於  
テハ正當ナリト謂フヲ得ヘシ而シテ法律上現  
行シテ徵收スル租税ヲ継続シ得ルハ論ヲ須ク

スシテ明白ナルカ故ニ其承諾ハ固ヨリ徵税ノ  
一定ノ額額ニ限ルヲ得ヘク是レ即チ配分税ノ  
必要ノ由リテ来ル所ナリ然レモ今此ニ對シテ  
定分税ト雖豫算上一定ノ額額ニ於テ之ヲ賦課  
スヘク又毎年租税ノ變動スルハ納税義務者ニ  
困難ヲ予フヘシトノ駁論ヲナスヲ得ヘシ  
然レモ憲法ニ從ヒ法律上現行スル租税ニ關シ  
毎年承諾ヲ受クルヲ要セザルトキハ配分税ノ  
國法上ノ必要モ亦從テ消滅ス且巴威ルノ如キ  
毎年ノ承諾ヲ要スル國ニ於テモ亦定分税ノ資

格ヲ以テ新ニ之ヲ承諾スルヲ得ヘシ其承諾ハ固ヨ  
リ一ノ方式タルニ過キス  
故ニ配分税ハ財政上ヨリ見ルモ國法上ヨリ論  
スルモ必要ナキモノニシテ予ハ定分税ヲ以テ  
寛大ニシテ實際簡便ナルモノト判定ス  
此ニ高一ノ考慮ヲ要スルハキコトアリ即毎年ノ  
國費ハ毎年一定ノ總額ヨリ成ルヲ以テ如何ニ  
此總額ヲ徴収スルヲ尤便ナリトスルヤノ問題  
是レナリ若シ定分法ニ依テ租税ヲ徴収スルト  
キハ豫メ其總額ヲ明知スルコト能ハサルカ故

ニ收入ハ以テ毎年ノ總費ヲ償フニ足ラサルコ  
トアルヲ免レス又新ニ支出ヲ要スル為總費ノ  
増額ヲ要スルコトナキニ非ス不動定分税ノ制  
ニ於テハ毎年収入ニ不足ヲ生スルコトアリテ  
収入支出ノ必要ナル平均ヲ失ヒ負債殊ニ浮動  
負債ヲ契約スルニ至ルヘシ  
此弊害ハ有動定分税ノ制ヲ設ケ之ヲ鑑テノ租  
税ニ用中ス其需用ニ從ヒ一二ノ税ヲ撰ンテ毎  
年其税率ヲ高低スルコトニ依テ之ヲ避クルヲ  
得ヘシ英國ニ於テハ收入税ニ此制ヲ用中巴威

尔ニ於テハ地稅及間稅タル釐餉稅ニ此制ヲ用  
工ノ其重要ナルモノハ釐餉稅ニ限ル今通常  
ノ不動定分稅ハ豫算上一定ノ額ニ止リ其他高  
支辨スルハキ費用アルトキハ必要ナル金額ヲ得  
ルニ要用ナル丈有動定分稅ノ稅率ヲ増加シ又  
他年ニ於テ減額スルヲ得ハシ此制度ニ適當ス  
ルモノハ收入稅及内地ノ間稅ナリトス何トナ  
レハ收入稅ノ額ニ變更アルを隨產上ニ妨害ヲ  
加フルコトナク間稅ハ結局消費者ノ負担ニ歸  
スレハナリ此ニ一例ヲ舉ケンニ巴威爾ニ於テ

釐餉稅ヲ増減シタルトキハ其効力ハ其年麦酒  
ノ價ヲ變動スルコト一二<sup>パーセント</sup>ニ過キス是レサレ  
テ困難ナルコトニ非ス故ニ之ヲ各種ノ諸稅ニ  
用中ス二三ノ納稅物件ニ用中タル有動定分稅  
ヲ以テスレハ均ク配分稅ノ利益ヲ見ルヲ得ハ  
ク而シテ其利益タル一層簡便ナリ但地稅ヲ以  
テ有動定分稅トスルトキハ收入尤多カルヘシ  
ト蓋予ハ之ヲ贊成セズ何トナレハ予ノ見ル所  
ニ據レハ地稅ノ負担ハ可成變動セシムヘカラ  
ス又重キニ過クヘカラ人間稅ハ之ニ反シテ受

動セシムルヲ得ハク又容易ニ増加スルヲ得レ  
ハナリ

千八百八十七年六月廿七日

ハ、口エスレル拜

問

英國ハ固定資本ナル特別収入ヲ設ケテ以  
テ<sup>フンソリテリトリアン</sup>室費國債ノ支拂及或官吏ノ俸給ヲ支給ス  
當テタリ抑裁判官又ハ検査院官吏ノ俸給ト  
ニ外交官及其他ノ行政官吏ノ俸給ハ他ノ行  
事務ノ經費ト區別シテ一層之ヲ重要トシ其異  
動ナキヲ保證スルノ必要アル乎如何、貴下ノ教  
ヲ乞フ

明治二十年六月六日

口エスレル君

答

英國ニ於テ豫算全体ヲ區別シテ固定即永遠ニ  
承諾シタル豫算有動即毎年承諾スル豫算トス  
ルハ此レニ準スル収入ノ固定ト有動トノ區別  
アルニ起因スルモノナリ或ル收入即所謂ソ  
ソリデーテットフンドハ永遠國王ニ向テ之ヲ承  
諾シタルモノナルカ故ニ之ヲ以テ支弁スル支  
出ト共ニ毎年新メニ承諾ヲ受クルヲ要セス而  
シテ此収入ハ國家收入ノ大部ヲ成スモノニ  
テ予ノ知ル所ニシテ果シテ誤謬ナクンハ此收

入ハ大凡全收入ノ四分ノ三ニ居ル然レモ收入  
税ノ如キ他ノ收入ハ其時ノ需用ニ充ルニ必要  
ナル額ニ於テ毎年之ヲ承諾スルカ故ニ其税額  
ハ毎年増減アルヲ免レズ蓋有動豫算ハ陸海軍  
及文務ニ関スルモノニシテ又文務ヲ分テ七  
種トス一公共ノ土木ニ行政官ノ俸給及雜費三  
警察及司法事務四技術學術及教育五太守及殖  
民地官吏ノ俸給六恩給及給助七其他諸般ノ事  
務是レナリ

此制度ハ財政上ニ在テハ固ヨリ議院ノ毎年豫

算承諾ノ範圍ヲ限局スルノ利益アリ何トナレ  
ハ收入支出ノ多分ハ此レニ依テ議院ノ承諾ニ左  
右セラル、エトナク其承諾ハ唯時々ノ変更ノ  
際ニ之ヲ要スルノミナリ然レモ政事上  
ニ於テハ此レカ為ニ何等利益アルコトナシ蓋  
陸海軍ニ於ケル如ク有動豫算ニ属スル支出モ  
亦均ク經常ノモノナルカ故ニ此レカ為ニ必要ナ  
ル支出ヲ政府ニ予ヘサルトキハ國家行政ハ全  
ク中止セサルヘカラス何トナレハ陸海軍及文  
務ナクテハ行政ヲ継続スルコト能ハサレハ十



リ之ヲ要スルニ豫算一部ノ拒否ハ政事上豫算  
全部ノ拒否ト同一ノ効力アリ  
其他英國ノ制度ハ之ヲ日本ニ移植スルヲ得ス  
何トナレハ日本憲法ニ從ハハ普國ニ於ケル如  
ク一タヒ政府ニ許シタル收入ハ永遠ニ承諾シ  
タルモノニシテ其新承諾ハ新稅ヲ設クルトキ  
或ハ現行ノ稅ヲ増額スルトキニ非サレハ之ヲ  
要セサレハナリ既ニ他ノ意見書ニ陳ハタル如  
ク一タヒ是認シタル收入ハ議院ノイニ於テ受  
更スハカラストノ原則ヲ設クルヲ得ルトキハ

議院ノ豫算承諾權ハ實際專新支出或ハ新收入  
ニ關スルニ止マルヘシ然レモ是レ亦英國ノ有  
動豫算ト稍異其主義ヲ異ニス即英國ノ有動豫算  
ニハ亦教養ノ固定支出ヲ包含スルモノニシテ  
時宜ニ依テハ内閣ニ辭職ヲ強迫スルノ手段ト  
ナスコトヲ得  
又一方ヨリ見ルトキハ毎年豫算全体ニ關シテ  
議決スルヲ尤可トスルモノ、如シ何トナレハ  
固定支出ニ對シテモ時ニ節減ヲ建議スルヲ得  
又政府ニ於テ之ニ同意スルコトナレハ

之議院此支出ノ増額ヲ建議スルコトナキニ非  
ス例ヘハ或ル俸給ノ増額ヲ建議スルカ如キ是  
レナリ此レニ及スル英國ノ制度ハ予ノ見ル所ニ  
於テハ節減ノ道ヲ設クルニ非スレテ專便宜ト  
時日ノ短縮ヲ目的トスルモノ、此レ  
普國ニ於テハ經常支出ト臨時支出ノ區別ヲ設  
ク而シテ毎年此二種ノ支出ヲ承認スルモノ  
ト是レシタリ、支出ニ関シテハ其承認ハ實際方  
式タルニ過キズ此區別ハ能ク財政ノ実況ヲ  
通觀セシメ且承認ノ疑問ヲ少カラシムルノ点

ニ於テ利益アリ何トナレハ一度限りノ支出ハ  
經常支出ニ比シテ容易ニ承認セララル、ハ当然  
ナレハナリ

千八百八十七年六月廿一日

ハ、口、卫、ス、レ、ル、拜

問

議院ノ設アル國ニ於テ議院ノ豫算ヲ議スルハ  
 多少其制限ヲナシ得ヘキニモセヨ到底立憲上  
 ノ權力ニ於テ次クハカラサルノ要素タルコト  
 疑ナシ  
 故ニ立憲國ニ於テ政府ト議院ト適當ノ調和ヲ  
 保テ法治國ノ美果ヲ得ルモ此点ニ在リ又議院  
 ト行政トノ間ニ不幸ナル軋轉ヲ生シ遂ニ國ノ  
 進歩及安全ヲ妨ルニ至ルヘキモ亦此点ニ在リ  
 此事ハ憲法上ノ根本主義ニ係ル問題ニシテ各

國ニ行ハル、所ノ各種ノ制限法ト及吾人ノ今日種々ノ勞苦ヲ用ヒテ設立セント試ル所ノ制限法ニ到底十分ナル成效ヲ見ルハキ者ニ非ナ  
ルハク詔ヲ易ヘテ言ハハ枝葉ノ法則ニ其成效ヲ見ルハカラズシテ寧ニ他ニ包合的ノ作用アリテ其根本タルハキヲ見出スハキナリ  
此ノ包合的ノ作用ト即チ英國ニ在テハ議院ノ信用ヲ以テ内閣ヲ組織シタル故ニ議院ハ又内閣ノ行政經費ニ向テ毎ニ信用ヲ置ク事吾國ニ在テハ王室歷代ノ家訓トシテ兵備ヲ除ク外

王室費及官吏ノ給料ヲ初メ行政上ニ嚴密ノ節儉ヲ行ヒ戰時及平時ニ拘ラス其美風ヲ改メテルカ故ニ人民ハ敢テ王室政府ノ濫費ヲ疑フノ心ナキコト是ナリ

英國及吾國ノ實況ハ國民ノ良心ニ起因スル者ニシテ政略及法律上ノ問題ニ非ス即チ憲法ノ第一ノ貴重ナル根本主義ナリ凡ソ立憲ノ國ハ此ノ西國ノ其一ヲ學フコトヲ忘ルハカラス然ラザレバ豫算ノ議決ニ於テ何等ノ巧妙手段ヲ用ヒテ議院ノ權ヲ制限スルコトヲ試ルモ其効果

ハ至テ少小ニシテ遂ニ佛國又ハ伊西把尼牙ノ  
立憲タルコトヲ免レサランカ此レ予カ疑ヲ釈  
シテ能ハサル所ナリ  
予ハ貴下ノ起草憲法ヲ吟味シ又豫算ノ事ニ付  
各種ノ答示ヲ得タルノ終ニ於テ此結局ノ問題  
ヲ以テ更ニ貴下ノ高尚ナル明教ヲ示サレシ  
ヲ乞フ

明治二十年六月六日

井上

口卫スレル氏

答

予ハ憲法案ヲ起草スルノ際日本ニ於テモ普通  
ノ立憲制上ノ權利ヲ予フヘシト虽然レニ依テ  
君主ノ統治權ノ不羈ヲ害セサルモ、ニ、ニ、限  
ルハキ、主義ニ據レリ而シテ予ハ之ヲ必要ナ  
リト認ム何トナレハ日本ニ立憲制ノ憲法ヲ施  
行スルハ今ヲ以テ始トスルカ故ニ必ズヤ深ク  
注意慎重ヲ用キサルヘカラス抑々日本人ハ立  
憲制ノ事ニ於テ經驗ト熟練トヲヌクカ故ニ容  
易ニ意外ノ議決ヲナシ政府ノ自由ナル決断ヲ

妨々且國家ノ安全及平和ナル進步ヲ遮断スル  
ヤモ料ルハカラス

豫美議決權ノ議院ニ於ケルハ實ニ其要素タル  
立憲制上ノ權利ニシテ然レヲ予ハサント欲  
スルモ決シテ得ハカラサルナリ故ニ予ハ此權  
ヲ全ク予ハサルカ或ハ之ヲ予フルモ唯外觀ニ  
止マシ又或ハ單純ナル租稅承諾權ニ限ルヲ以  
テ甚ク不可ナリト認ム如ク憲法ハ必然不和ト  
誤解ヲ生セシメ大ニ政府ニ攻撃ト困難ト被  
ラシムルニ至ルハシ

予ノ主義ニ據レハ政府ハ然レナカリセハ其憲  
法上專有スル權利ヲ施行スルコト能ハサル所  
ノ支出ヲナスヲ得レシト虽又他ノ一方ニ於テ  
議院ハ支出ノ通法ト多寡ヲ審査シ且政府ノ提  
出シタル支出ニ當ツテキ方法ノ便否ヲ議決ス  
ルヲ得レシ即議院ハ此點ニ於テハ承諾ノ權  
ヲ有スハク若シ議院ト政府ノ間ニ叶議ノ調ハ  
サルトキハ議院ニ於テ最後ノ裁決ヲナス皇  
帝然レカ裁決ヲナスハナリ  
予ハ既ニ此ノ對抗ヲ可成避クハキ各種ノ方法

ヲ提出シタリ即純粹、法律上、問題、最上法  
院：於テ裁決セシメ、便宜上、問題、參議院或  
ハ會計検査院ノ意見ヲ問フ、一、政府ト議院  
ト：於テ遵守ス、一、豫算定額ヲ設クル、一、  
ト是認コタル定額、議院：於テ之ヲ遵守ス  
ハキ、性弊ヲ有セコル、一、如キ是レナリ固  
ヨリ此方法ハ仲裁手段ニ過キスト、他國：於  
テモ既：之ヲ實施シ政府ト國會ト、間、調停  
ス、一、カラサル爭議ヲ未裁：防キ且双方ノ威權  
ヲ害セズレテ協議セシムル、効用アルハ疑ナ

上ニ陳ハタル所、即予カ考案、法律上、状況  
ナリ然レモ既：論シタル如ク政府ト人民、間  
ノ關係ハ獨リ法律上ニ止マル、一、カラサル、一、固  
ヨリナリ元素法律ハ各人ノ意思ノ自由ニ對シ  
テ一定ノ經界ヲ定ムト、其意思ヲ以テ常ニ法  
律ノ極端ニマテ貫徹セシトスルハ美事ニ非ナ  
ルナリ政事上欠クハカラサル、要素ハ節度ナ  
リ政府ト人民ト、間、關係ハ究ニ夫婦間、間  
係、如シ法律上ヨリ論スレハ夫、一家ノ主人

ナルカ故に婦ハ之に服従セサルハカラズ也  
夫ハ百事、闡レ統御ヲナス：止マラス又婦  
ニ向テ身注意ヲ加ヘ時宜ニ依リテ、婦ノ意見  
ニ従ハサルハカラズ若シ夫：シテ常ニ婦ニ  
慮スルコトナク必ズ自己ノ意思ヲ貫徹セシト  
スルトキハ温和ナル婦ト虽常ニ不快不幸ヲ感  
ズ遂ニ抗抵ヲナス：至ルハ其甚リ政府モ亦  
人民ノ至當ノ冀望ヲ容レテ其信用ヲ得ルコト  
ヲ力ヲサレハカラズ故ニ予カ議院ノ豫筭議決  
權：對シ政府ノ統治心ヲ以テ何時タリトモ排

除スルヲ得テキ空權タラシムハカラズトノ意  
見ヲ抱ケルコトハ既ニ數回陳ハシル所ナリ要  
スルニ政府ノ支出スル金錢ニ常ニ人民ノ金錢  
ナルカ故ニ豫筭議決權ハ人民ノ辛苦中ヨリ生  
シタル金錢ヲ擅ニ支出スルハカラズトハ法律  
上ノ原則ニ基クモノナリ予ハ嘗テ陳ハシル如  
ク大臣ハ財政上ノ問題：於テ力ノヲ議院ノ冀  
望ヲ採用スルキハ見テ執ルモノナリ加之大臣  
ニ於テ其冀望ヲ採用セサルトキハ英断ヲ以テ  
其冀望ヲ容レ以テ國家内部ノ分裂ヲ防グベシ



得ル。常々皇常ノ権内ニ在リ、此事ニ関シ予ハ  
巴威再國ノ一例ヲ以テ、揚テ得ル。此例ハ  
直接ニ財政上ノ問題ニ關係セサルニ在リ、財  
政上ノ問題ニ適用スルヲ得ル。距今二世前、  
マキシミリアン王ノ時代ニ於テ、エルク  
正首府ハ自由ノ反對主義ヲ以テ内閣ニ困難ヲ  
被ラシメタルモ、誠實ニシテ其任ニ適シタル市  
長ヲ撰奉シ、此際内閣ハ國王ニ就テ其撰奉  
ノ認可ヲ拒コントシテ、養上ニシテモ國王ハ在  
レ、勅語ヲ以テ之ヲ認可シ、リ朕ハ朕カ人民ニ

對シテ親和ヲ欲スト、故勅語ハ瞬間ニ全國ニ傳  
播シ、人民ハ歡心ト満足ヲ得、政府及人民ノ調和  
ハ重ク、且曰ク、徳シ内閣ニ亦其職ヲ退カサリシ  
故ニ豫算上ノ問題ニ於テ熟練ナル調和政略ヲ  
執ル。甚ク嘉ス。キノ事ナリ、要スルニ政府ハ  
常々可成節儉ヲ旨トシ、國會ト調和スルトキハ  
如ク困難ヲ見ルコト甚ク稀ナリ、獨逸國ニ於テ  
ハ軍政豫算及主ラ政黨上ニ關係ナル行政ノ支  
出ニ在リ、往々困難ヲ生ヒ、軍政豫算ニ於テハ  
人民遂ニ政府ニ同意シ、行政ノ支出ニ於テハ政

府遂に人民に同意シタリ  
予カ日本ノ現況ヲ判定シ得ル限リ日本人民  
ハ陸海軍ノ為ニ如何ナル犠牲ヲモ暮マサル  
ハレト虽行政ノ支出ハ外交ニ関スルモノト虽  
之ヲ節減セントスルモノ、如レ予ハ日本ニ於  
テ可成人民ノ冀望ヲ参酌シ政府ハ人民ヲシテ  
獨リ議院アルカ為ニ僅ニ浪費ヲ制スルヲ得  
トノ思想ヲ抱カレハハカラヌト信ス若シ人民  
ニ於テ常ニ其冀望ヲ参酌セラル、ノ感覺ヲ生  
スルトキハ政府ヲ信用シ議院ニ於テ豫算ノ争

議ヲ生スルニ必ス危険ニ至ラサルコト必然ナ  
リ如何ナル場合ニ於テモ政府ト人民ノ間ニ善  
良ナル道德上ノ關係ヲ維持スルニ必要ノ事ナ  
リト虽此レカ為ニ双方相互ニ其權利ト冀望  
トヲ尊重シ且承認セサルハカラス政府ノ人民  
ヲ視ルニ之ヲ物件視スルノミナラス正常ノ意  
思ヲ有シタル權利アル人トシテ視サルハカラ  
ス之ヲ要スルニ立憲制ノ憲法ニシテ此原則ニ  
基カサルモノナク若シ此原則ヲ蔑視スルトキ  
ハ必ス内訌ヲ起スニ至ルハキナリ

千八百八十七年六月廿八日

ハロエスレル

答

豫算議決權ノ問ニ関スル意見

豫算ノ細目ニ関スル貴問ハ豫算議決權ノ全体ニ涉ルニ非サレハ論究スルヲ得サルカ故ニ可成簡單ニ公權ト關涉シテ貴問ニ對シテト欲ス

第一 經濟ノ才一要素ハ收入支出ノ間ニ平均ヲ保タレハルニ在リ而シテ其目的ハ大ナル經濟殊ニ國家ノ經濟ニ於テハ定明ノ豫算ヲ立ルニ非サレハ之ヲ達スルコト能ハズ故ニ專制ノ國ニ於テモ既ニ完全ナル豫算ヲ作り可成之ヲ

守ルノ計畫アルヲ要シタリ普國ハ專制ノ國家  
タリシ時ニ於テ既ニ率先シテ此財政術ノ需要  
ヲ充タシタルハ世人ノ知ル所ナリ日本ニ於テ  
モ此事ニ関シテ既ニ編纂スヘキノ計畫ヲナセ  
リ  
然レ氏女ノ急務ヲ正當ニ履行シ可成收入支出  
ヲ適切便宜ニ整理シ殊ニ之ヲ節約シ又國家ノ  
信用ヲ鞏固ニセシトスル為ニハ國會ノ憲法上  
ノ參典ヲ待テ始テ大ナル保証ヲ見ルコトヲ得  
ルハ疑フヘカラサルナリ又政事上ノ關係ニ於

テハ國會ノ憲法上ノ參典ニ就テ更ニ重要ノ利  
益アリ即人民ハ政府ノ專横ヲ防止シタルノ感  
覺ヲ生シ負担及其費用ノ目的ヲ確定スルノ際  
並ニ此費用ヲ監督スルノ際代人ヲ以テ自ラ參  
典スルコトヲ得其賦課ヤラレタル負担ハ最必  
要ナルモノニシテ專國家ノ目的即全体ノ利益  
トナル目的ノ為ニ費用セラハルモノナリトシ  
信任ヲ得ル是レナリ  
然レ他ノ一方ヨリ之ヲ見ルトキハ上陳ノ利  
益ハ議院ニシテ豫算ヲ議決スルノ際國家ノ真

正ノ利益ヲ重シシ党派ノ利益ノ爲ニ牽制セラ  
ル、コトナキニ非サレハ存立スルコト得ハカ  
ラス而シテ又議院ノ廣大ナル豫算議決權ハ行  
政ヲ左右スルノ權カタルハ明カナリ國民自治  
ノ制ニ養成セラレ公共ノ需要ヲ了解シ又統治  
ヲサスノ資格ヲ有スル党派ヲ組織シ議院ノ多  
數ヲ以テ内閣ヲ組織スル原則ヲ行フノ國ニ在  
リハ議院ニ廣大ナル豫算議決權ヲ与フルモ國  
家ノ利益ヲ害セサルハシト是れ要件ヲ存セザ  
ル國ニ於テハ如此權利ハ勢必ス爭議ヲ生スル

ニ至ルハク而シテ統治權ノ愈強大ナルニ從テ  
爭議愈々烈ナルヲ見ルハシ此等ノ要件ハ日本  
ニ於テ之アルヲ見ス且方ニ強大ナル政府アル  
ヲ必要トスルノ時ニ當レリ加フルニ國民ハ統  
治ノ資格アル大党派ヲ組織スルヲカノスレテ  
好シテ小党派ヲ組織スルノ傾向アリ故ニ予ハ  
此事ニ関シテ日本ハ日耳曼人種國ノ例ニ倣フ  
ヘシト信ス即英國及獨逸國ハ漸次歩ヲ進メテ  
現今ノ開明ニ至リタルモノニシテ日本ニ於テ  
モ亦時ヲ逐フテ英國會ノ權利ヲ擴張スルニ至

ルハケ俄、立憲國カ開明ニ依テ得タル所、最  
上級ヲ模倣ス、カテニ於テ諸國カ一般ノ機能的  
ノ進歩ニ從ヒ專制國ヨリ立憲國ニ變遷スルノ  
際如何ナル方法ヲ施シタルヤヲ觀察ス、キキナ  
リ  
予カ左ニ提出スル所ノ意見ハ、民主主義ニ依ルモ  
ノナリ

第二 總テ豫算議決ノ起源ハ何レノ國ニ於テ  
モ收入ノ承諾ニ在リ日本ニ於テモ國會ニ於テ  
ヲ予フルニ弊害アルコトナシ然レモ予ハ豫算

議決權ヲ新稅ノニ限リ凡テ收入ニ毎年承諾  
ヲ要スルトイハル自耳義憲法ノ原則ヲ取ルハ  
カラスト信ス左ニ掲ル所ノ成文ハ此主義ニ適  
フナシ

議院ノ承諾ヲ經ルニ決サレハ新稅ヲ設ケ又  
ハ現行ノ租稅ヲ増額若ハ變更スルコトヲ得  
ス

此原則ハ普國憲法亦百九條ノ意義ニ同シト虽  
普國憲法ノ成文ハ元來獨リ新旧變遷ノ効用ヲ  
有スルコトヲ知ラシムルノ感覺ナキニ非ス故

予ハ巴威再憲法第七章第三條ノ成文ヲ傳レ  
リトシ其承諾シタル租税ハ繼續シテ之ヲ徵收  
スルノ原則ヲ以テ間税ニ止メスレテ之ヲ直税  
ニ及ホスリ正當ナリトス

若シ此主義ニシテ果シテ釐成ヲ得ルトキハ自  
耳義憲法ヨリ普國憲法(第九十九條)ニ傳テシタ  
ル原則ハ之ヲ避クルヲ可ナリトス數多ノ有名  
ナル國法學者ノ説ニ政府ハ唯豫算法律ニ依テ  
現行法ノ租税ヲ徵收スル法律上權利ヲ有レ其  
現行法ハ縱令永遠ニ効力ヲ有スルモナラズ

モセヨ毎年釐スル所ノ施行法即豫算ニ依ルニ  
非サレハ之ヲ施行スルヲ得サルカ故ニ第九十  
九條ニ於テ要スル施行法ノ成立セサルトキ又  
ハ成立セサルノ間政府ハ永久ノ法律ニ基ク所  
ノ租税ヨリ生スル收入ヲモ徵收スルノ權ヲ有  
セストスルハ即此自耳義ノ原則ニ由來スルモ  
ノナリ此説ハ獨リ黨派ノ主義ニ止マラス守旧  
主義ヲ執ル所ノ法學者モ亦第九十九條ノ法律  
上理由ニ依テ主張スル所ナリ予ハ今ナク止  
氏ノ言ノ如ク果シテ此主義ノ正當ナルヤ否ヤ

「此ニ之ヲ講究スルヲ欲セスト雖第百九條ノ  
主義ヲ執ラントスルトキハ第九十九條ノ如キ  
數多ノ國ノ憲法ニ掲ケタル所ノ規定ヲ斥ケテ  
此兩様ノ關係ヨリ起ル争議ヲ豫防スヘキハ上  
ニ陳ハタル所ニ依テ知ルヘキナリ  
其他議院ニ租稅承諾權ヲ予フルハ此權ヲ以テ  
信任諾否ノ手段トナシ或ハ政府ノ為ニ強テ承  
諾ヲナサシムルノ方法タラシムルニ非ズ此權  
アルカ為議院ハ同時ニ憲法上ノ義務ヲ負擔ス  
ヘキカ為ナルコトヲ憲法ニ明言スルヲ可トス

故ニ左ニ掲クルニ箇ノ成文ヲ採用スべシ

議院ニ經常及非常ノ國費ニ充ツル為必要ナ  
ル收入ヲ承諾スルノ義務ヲ有ス(索遜憲法第

九十七條今八百三十二年十月十二日ノゾラ

ウニシヨリ并ヒ「憲法第百七十三條」

租稅ノ承諾ニハ其租稅ノ費出ト直接ノ關係

ヲ有セサル約束ヲ附帶セシムヘカラズ(巴威

再憲法第七章第九條瓦敦堡第百十三條索遜

第百二條「セルビ」第六十四條」

第一ノ原則ハ其必要ナリトノ語ニ就キ直ニ争



議ヲ生スヘキカ故ニ嚴格ナル法制ヨリハ寧ロ  
政事上ノ主義ヲ包含シタルモノタルヲ予モ亦  
之ヲ認ムル所ナリ然レハ此原則ヲ憲法ニ掲載  
シテ以テ其主旨ヲ明カシ且併國ニ淵源レテ  
一般ニ敷及シ議院ノ隨意ニ行フヲ得ル所ノ單  
一ノ豫美議決権ノ主義ニ對シ之ヲ防止スルヲ  
カモルヲ以テ便宜ナリトスヘシ  
此ニ反シ第二ノ原則ニ直接ナル實際上ノ効用  
ヲ有シ英國法ニ於テモ「ライキングビル」ヲ以テ  
認メタル禁止ヲ包含ス又千八百六十九年「セ

ルビ」憲法第六十四條ニ於テモ亦此レト同一  
ノ禁止アリ

第三 左ニ列記スル事件ニ國會ノ承諾ヲ受リ  
ヘシトノ規定ヲ設クルハ弊害ナキヲミナラズ  
又國家ノ利益タルハシ

- (甲) 國債ヲ興スコト
  - (乙) 國家財産ヲ賣却スルコト
  - (丙) 保證ヲ負擔スルコト
- 然レハ羅馬人種ノ憲法及普國憲法ニ於テ見ル  
所ノ法律ヲ要ストノ語ヲ避ケサルハカラス何

トナレハ此事タル行政上ノ處分ニシテ法則ノ  
類ニ非ス而シテ此語ニ由テ意義錯誤ヲ来タス  
モノナレハナリ故ニ此處分ハ兩院ノ承諾ヲ受  
ルニ非サレハ之ヲナスコトヲ得ハカラストノ  
文ヲ以テ之ヲ揭ルヲ可ナリトス  
急迫ノ場合ノ爲ニ〃千八百五十一年五月五日  
ノ改正憲法第百五條及セルビ憲法第百六  
十六條ニ擬シタル規定ヲ設ハラ可トスヘシ  
第四 豫算議決權ノ尤困難ナル問題ハ支出ノ  
確定是レナリ元來法律上政府ノ權内ニ在ル收

入ヲ以テ國務ヲ處理スルニ必要ナル費途ニ充  
ツルハ施政權ノ務ナリ往昔其國法ニ據ルニ中  
獨逸諸國ノ憲法ニ從テモ皆然ラサレハナレ英  
國ニ於テハ第十七世紀ノ末葉ニ於テ始メテ議  
院ニ所謂「アツプロパリアチオン」スクラウセル  
定ノ費途ニ充ツルニ條款ヲ以テ租稅承諾ノ際  
行政ヲ制限セントレタリ中獨逸諸國ニ於テ  
ハ議院ニ歸スル收入承諾ヲ議決スルハ當テ當  
然具必要ナルヤ否ヲ審査スルハ點ヨリ見レハ  
議院ニ間接ニ支出上ニ勢力ヲ有スルカ如シト

虽巴威再憲法第七章第三條乃至第八條及敦堡  
憲法第百一十一條第百一十二條第百一十八年。巴  
丁憲法第五十三條以下。據ルニ當テ白耳義佛  
國、倣ヒ豫算議決權ノ範圍ニ於テ直接ニ支出  
承諾權ヲ議院ニ予ハタルコトナシ  
予ハ第一ニ陳ハクハ大旨ヲ執ル者ナレハ當分  
如此支出承諾權ヲ議院ニ予ハサルノ意見ヲ提  
出スルレ人或ハ予カ説ヲ駁シテ曰ニ彼独逸諸  
國ノ憲法ニ據レハ豫算モ亦議院ニ提出スルレ  
ト然レハ彼憲法ニ明言セル如ク(巴威再憲法第

七章ニ於テ「故ニ」ナル語ヲ用キ反敦堡憲法第百  
十一條ニ於テ「為レ」ナル語ヲ用キタリ)此レ乃收  
入ノ承諾ニ關シテ政府ノ榮議ヲ証明スル為ニス  
ル者ニシテ豫算全体ニ關シテ議院ノ議決ヲ取  
ル為ニハ非ナルナリ  
此ニ反シ豫算法ヲ以テ確定シタル支出ノミヲ  
政府ニ許ス所ノ憲法ハ反對ノ主義ヲ執ルコト  
世ノ普ク知ル所ナリ(白耳義第百一十五條荷蘭第  
百十九條第百二十條盧克山堡憲法第百四條獨  
逸帝國第百六十九條普國第百九十九條西班牙第百八

十五條葡萄牙第百三十六條乃至第百三十八條  
千八百五十二年、同國法律第十二條第十三條  
暹馬第百四十九條「ル」：「第百十三條和臘第六  
十條等」

此豫算議決權ノ弊害ハ世人ノ知ル所ナリ今茲  
權ヲ制限スルノ方法ヲ求ムルニ尤ノ如シ

(伊) 議院ノ承諾ハ單一ナル有益ノ支出ニ於テ  
之アルヲ要スレド必要ノ支出ニ於テハ然ニス  
然レバ此區別ハ猶價値ナキモノナリ何トナレ  
ハ此レカ爲堅確ナル經界ナレバナリ

(呂) 英國ノ例ニ倣ヒ(「コンソリテリテト」フニシ)

支出ノ不動部分ヲ豫算中ヨリ分離シ其有動部  
分ノニニ關シ毎年議院ノ承諾ヲ受クハレ此考  
案ハ專「ス」ン「氏」ニ出タルモノニシ「氏」國  
家豫算ト(不動部分)政府豫算(有動部分)トノ區別  
ヲ「サ」ント欲シ「グ」ナ「イ」スト「ラ」バ「ン」ト「ミ」ル  
「リ」ガ「子」ル「及」其他數多有知ナル獨逸國法律者  
ノ賛成ヲ受ケタリ然レド如何ナル支出ヲ不動  
部分トス「キ」ヤノ詳細ノ誤ニ至リテ「未」ク一  
報ナラズ但國家ノ法律上ノ支出(國債赤字經費

多少異論アル所、官吏ノ俸給、恩給、法律上團結  
体及公院ニ于テ補助金等ノ不動部分ニ屬ス  
ルコトハ諸家ノ説既ニ一定ニ帰シタリ又他ノ  
學者ハ其他大體ニ於テ疑フヘカラサル國家機  
關ノ制度ニ必要ナル定額ヲモ不動部分ニ算入  
シ毎年承諾ヲ受クヘキモノハ只々此支出ノ増  
額ト及他ノ國家ノ支出ニ限ルヘシトスル者ア  
リ但シ此範圍ニ於ケル所謂經常豫算ハ従来實  
際ニ之ヲ施行シタルノ國アルコトハ此ニ及  
スル困難ナル弊害論ハ吾國憲法改革論第百九

十葉乃至第百九十二葉ニ於テ切論シタルヲ以  
テ以テハ之ヲ引用スルヲ以テ足レリトモ然レ  
ニ政府ノ法律上ノ義務ヲシテ定期ノ承諾ヲ受  
ケシメサルハ正當ナル考察ニシテ年來議院ノ  
進歩ニタル國ニ於テハ予ハ此防障ヲ以テ實際  
ニ於テ豫算議決權ノ濫弊ヲ制止スルニ十分ナ  
リト認ム  
然レハ他ノ一方ニ於テ豫算ノ爭議ハ通例法律  
上ノ義務ニ關スルモノニ非サルコトヲ看過ス  
ヘカラス歟考察ノ價值タルハ政府ハ豫算ノ成

立ヤサル場合：於テモ其支出ヲナス：妨ケナ  
キカ故：国家ハ豫算ヲ拒否：依テ其命運ヲ危  
クスルコトナキ：在リ而シテ自由論者モ亦此  
を棄：同意ヲ表スル者多シ何トナレハ豫算承  
諾ハ此レニ依テ始メラ議院ハ宣用スルヲ得ル  
指利トナレハナリ又英國ノ例ヲ以テ明ナルカ  
如リ議院ノ地位ハ此レニ依テ衰弱スルニ由スレ  
テ却テ鞏固ナレニ至ルナリ  
故：予ハ第一ニ揚ケタル理由ニ依リ此制限モ  
亦日本ノ為ニ十分ナリトスルヲ得ヌ

(波) 独逸帝國憲法ハ其第六十二條ニ於テ軍制  
支出豫算ヲ確定スルハ陸軍隊ノ法律上ノ組織  
：準據スル原則ヲ揚ケ若シ此原則ヲ擴張シテ  
法律上一切ノ組織ニ及ホストキハ豫算議決権  
ヲ正当ニ施行スル為有益ナルニ限ラ得ルニ  
ナリ予ハ同ノ如ク依ルモ組織ノ区域内  
：於テ政府ハ議院ノ間ハ一切ノ事議ヲ除キ  
ラシト謂フ：亦ス何トナレハ現行ノ組織ヲ維  
持スル為如何ナル費用ヲ要スルヤ否ニ関シテ  
其誤ニ異ニシ得レハナリ加之日本：於テハ從

未法律ヲ以テ組織ヲ定メタルコト甚ク少ク予ハ軍隊及裁判所ノ編制ノ如キハ憲法施行前ニ必ズ法律ヲ以テ制定セラレシメテ望ムルニ國王ニ帰スル組織權ニ對シテ豫算議決權ノ如何ナル地位ヲ占ムルヤノ問題アリ予ノ所見ニ據ルニ千八百六十九年二月三十日ニ「オイレシガ」ルニ伯ヲ以テ普國政府カ明言シタル主義ヲ正當ナリトスル主義トハ即行政廳ノ組織ニシテ法律ニ基カサルモノハ勅令ヲ以テ制定スルヲ得ラシト聖官廳ノ新設又ハ改革ノ為ニ政府ニ

於テ全國ヨリ金額ヲ請求スルモノハ必ズ國會ノ承諾ヲ要スト謂ハル是レナリ君主ハ所謂組織權ヲ有スルカ故ニ其組織ノ為ニ必要ナル金額ハ議院ニ於テ必ズ之ヲ承諾スベシ又ハ一般ニ議院ノ承諾ヲ要セサルモノハ推折ニ至リテハ予ハ「カイネ」(巴威再憲法論)及多數ノ獨逸國法學者ト共ニ議院ノ權利ト一致セサルモノト認ムルニ既ニ第一ニ於テ陳ハルカ如シ之ヲ要スルニ國王ハ承諾ヲ受ケタル金額内ニ於テハ其組織權ノ施行ヲ制限セラル、コトナシト

果此範圍外：於之。租稅ノ承諾ヲ求ム。之。是  
レ民主義ヲ採用セラル。トキ。在ノ原則ニ基  
ク。所。成文ヲ設ケ。レ

豫算ヲ確定スルノ際。法律又。法律上効  
カアル所。勅令ニ基ク。陸海軍及官廳ノ組織  
ヲ以テ基址トス。レ

然レ。此原則ニ依テ統治權ノ審判。對スル防障  
トナル。ニ。未ダ十分ナラズ。何トナレ。既ニ陳  
ハク。如リ国会ハ此原則上必要ナル支出ノ額  
ニ對シ政府ト其意見ヲ異ニスルコトアル。ニ

ナラズ又政府ハ法律上ノ義務(呂ノ處ニ陳ハク  
ルカ如シ)及上陳ノ組織ニ基ク支出ノ外尚莫大  
ノ費用ヲ要スルモ。數多アリ。此カ為ニ国会ノ  
自由ナル承諾ヲ受ク。ハケレハナリ

(仁) 憲法第百三條ノ八百五十二年五月五  
日憲法改正憲法第五條ノ五項ニ他ノ方法ヲ掲  
ク。此憲法ニ據レ。兩院。一院。於テ少クモ三  
分ノ二以上否決シタルトキ始メ其承諾ヲ拒  
ムルモノト見做ス。是レ政府ノ地位ニ於テ一層  
利益アルコト明カナリ。抑憲法ニ凡テ他ノ



法律案、閣シテ同一ノ規定ヲ掲クルカ故ニ  
第九十二條豫算承諾上ニ政主義ヲ及ホシタル  
理ニ背クモノニ非ズ然レバ日本憲法ニ於テ  
政主義ヲ執ラズシテ多数決ノ原則ヲ採用シ  
タルカ故ニ豫算案ノ閣シテハ特ニ例外ヲ設  
クルトキニ輿論ニ政府ヲ嫌忌シテ不服ヲ鳴ラ  
スニ至ラレ

(保) 然レ以上ニ陳ハルル考案ハ凡テ豫算ノ細  
別ニ俾随スル流用(六)カニテ禁ヨリ生スル困  
難ヲ避ケ得ルモノニ非ズ此禁ハ二三ノ憲法ニ

明言セル所ニシテ(白耳義第百十六條)普國會計  
検査院法第十九條論理上議院ノ支出承諾權ヨ  
リ生ズルモノナリ豫算全体ニシテ議院ノ承諾  
ヲ受クルヲ要スル固ニ於テハ流用ヲ以テ豫算越  
過ト見做シ國會ノ承認ヲ受クベキ固ヨリ論  
ヲ待タズ豫算ノ過度ナル細別ニ伴隨スル故原  
則ヨリ生ズル弊害ニ閣シテ「ケ」トス止氏ニ具  
普通ニ行ハルル所ノ法律及豫算ト題スル著書  
第百七十四丁以下ニ於テ適切ニ証明シタリ又  
予ニ云サレタル貴問ニ於テ既ニ簡明ニ陳ハラ

レタル所ナリ也：重要ナル點ハ細目ノ程度、  
在リト量從來嘗テ之ヲ發見シタル者ナレ他、  
一方ヨリ見レハ議院ト政府ノ間：多議ノ絶工  
サルハ即此向點ニ関スルモノ：シテ豫算爭議  
ハ最點ヲ離レス且立法ノ動搖已マサル佛國ヲ  
以テ適例トナスヲ得レシ「マウルス」佛國  
行政字典中ノ豫算ト題スル簡明ナル章ヲ考看  
スルニ、第二百八十八丁第四号第五号第二十  
号第二十一号第二十三号ヲ繕ク、レシ千八百二  
十七年九月一日ノ法律其後又千八百五十二年

乃至千八百六十一年ノ法律ヲ發スル前ノ佛國  
ニ於ケル如ク各省部門：依テ豫算ヲ議決シ其  
豫算内：於テ國王或ハ皇帝ノ允許ヲ得或ハ其  
允許ヲ得スレテ無限ノ派用ヲ許スハ固ヨリ簡  
單ナルカ如シ然レトモ佛國ノ歴史ニ徴スルニ  
此主義ハ勢必ス財政ノ弊失ヲ招キ且議院ニ予  
ハタル支出承諾權ト調和ス「カラサル」矛盾  
ヲ生スルカ故ニ訴訟軟訴及軋轢ノ已レ時ナキ  
ニ至ル又他、一方ヨリ見レハ實用ニ適スル一  
定ノ分界ヲ發見シタルコト未ダ嘗テ之「ラス

千八百三十一年一月廿九日及千八百七十一年  
九月十六日ノ佛國法憲克山堡憲法第百五條  
蘭憲法第百二十一條普國合訂旋香院法第十九  
條ニ如ク分界ヲ定ムルコトナク又問題ヲ論  
究シタル著書第三十九丁以下ニ於テ此問題ノ  
ト題スル著書第三十九丁以下ニ於テ此問題ノ  
編述ヲ参考スルニモ亦此分界ヲ察見スルコト  
能ハサルナリ大体ヨリ論スレハ中庸ヲ以テ正  
當ナルモノトモト謂フヲ得ハシト然レ關係ニ  
於テハ專議院ノ節度ニ一任スルノ外ナクコト

ナレ是レ殊ニ英國及奇異ニモ佛國ニ於テハ獨  
逸國ニ反シテ實際ニ行ハル所ナリ但支出承  
諾權ヲ與ヘラレタル如禪ノ議院ニ向テ節度ヲ  
望ムルカラサル狀況ニ予ラシテ尙分如此權利  
ヲ予ヘサルヲ可トスルノ談ヲ執ルニ至ラシメ  
タリ  
若シ憲法ニ於テ如此權利ヲ予フルトキハ左ノ  
規程ヲ設タルヲ可ナリトスルニ  
豫算ハ款毎ニ議決ス  
款ハ國費ノ大ナル部類ヲ包括ス

議院ノ承諾ヲ受ケスレテ派用ヲナスヲ得ル  
陸海軍ノ行政部内ニ限リ其他ノ行政部ニ  
於テ各款内ニ限ル  
其他ノ事ニ予ハ後來ノ進歩並特別ノ法律ニ一  
任スレト認ム

⑤ 其他猶財政ニ関スルノ困難ニシテ兩院制  
ヨリ生ズル者アリ何トナシハ英國ニ於ケル如  
ク上院ノ議決ヲシテ純然ノ方式ニ止マラシム  
ルヲ除ク外兩院制ニ依テ豫算ヲ成立シ難カラ  
シレレハナリ予ハ見ル所ニ兩院ノ意見互ニ異

ナル場合ニ於テハ可否ノ數ヲ通算スル憲法  
ヲ賛成ス(瓦敦堡第百八十一條巴丁千八百十九  
年ノ第六十一條瑞典第百六十九條同國國會組織  
法第六十五條)

⑥ 尤困難ナル問題ニ豫算ノ議一致セズ或ハ  
一定ノ期限内ニ其議一致セザル場合はレナリ  
數多ノ國ノ憲法ニ此場合ノ為ニ規定スル所  
ナリ豫算ニ依テ收入支出ヲ確定スルハ國家機  
関ノ憲法上義務ナリト憲法上ノ規定ヲ以テ  
足レリトセリ議院政治ヲ行フ國ニ於テハ通例

實：公規定ヲ以テ足レリトスレ何トナレハ  
議員、多数ニ其党中ヨリ出タル内閣ニ向テ必  
要ナル收入ヲ拒否スルコトナク或ハ議院ノ解  
散若クハ内閣員ノ辭表ヲ以テ雙方ノ一致ヲ回  
復スレハナリ此要件ノ存セサル國殊：普國ノ  
例ヲ以テ明カナルカ如ク統治権ノ強大ナル國  
ニ於テハ豫算爭議ノ場合ニ於テ如何ナル手段  
ヲ施スルキヤノ問題アリ  
收入：關シテ意見ヲ陳ハレ、第一ノ所、掲ケ  
タル普國制度ヲ行フノ國ニ於テハ一ニ困難ア

ルコトナシ即永遠ノ法律ニ基ク租税ニ其他ノ  
收入ト共ニ概令豫算成立セサルニ継続シテ之  
ヲ徵收スバシ其外ニ法律ニ基カスレテ豫算ノ  
シ：基キ或ハ臨時承諾シタル有勅租税：限リ  
テハ豫算ニ依ラズシテ之ヲ徵收スルヲ得ル日  
本ニ於テハ現行ノ收入ヲ以テ専分政務ヲ継続  
スルニ十分ナルカ故ニ豫算不成立ノ時ノ為ニ  
豫防スルノ必要ナカレハシ  
然レ反シ支出ニ關シ顯見ヲ陳ハレニ或ハ党派  
數多ノ法學者ノ說ニ於テハ凡ソ政府ハ豫算十

クシテ…支出ヲナスノ権ナキハ故ニ豫算ハ各  
種支出ノ法律上要件ナリト主張スレトモ又或  
ル党派及多数ノ有名ナル独ニ國法學者(分ナ  
ス)ラトハントシエルナキ工(上)ノ政府  
ニ豫算ナキトキト是政務ヲ継続スル爲必要ナ  
ル支出ヲナスノ権ヲ有シ只其責任ニ變更ナシ  
スルノこと主張セリ予ニ國法學者ノ枝葉ニ  
涉ル異説ヲ長ク講究セス又其主義ニシテ憲法  
ノ成文ト一致スルヤ否ラニ審査スルヲ欲セズ  
世人ノ知ル如ク吾國政府ハ憲法爭議ノ時代ニ

於テ第一ノ主義ヲ執リタレトモ豫算ナキ行政  
ニ憲法ニ合ハサルカ故ニ速ニ國會ニ向テ「イン  
テムニテ」トシテ請求シタル所ナリ  
今ヤ日本ニ於テハ獨ニノ國法主義ヨリハ佛國  
主義却テ廣ク流傳シタルカ故ニ既ニ國會ニ支  
出承諾権ヲ與フルトキハ上陸第一ノ主義即佛  
國主義ニ思ルナキ多数ノ同意者ヲ見ルニ必然  
ノ事ナリ故ニ憲法ニ於テ其權ヲ議院ニ與ヘ  
トスルトキハ又豫算承諾ハ政務ヲ継続スル爲  
國會ヨリ政府ニ與フル全權ノ意義ナリトスル

所ノ偏倚ノ主義ニ對シ憲法ヲ以テ之ヲ豫防セ  
ザルヲ力ナク而シテ其豫防ニ豫案ニ關シテ政  
府ト國會ノ議一致セザル場合ニハ支出ノ為ニ  
如何ナル手段ヲ施スルヲ憲法ニ於テ十分  
明瞭ニ指シルノ外良策ナカレハレ  
南独ニ諸國ノ憲法(巴威再第七章第七條巴丁第  
六十二條瓦敦堡第百十四條)ニハ其關係ニ於テ  
一ニ實際ニ適スル模範ヲ見ス此等ノ國ノ憲法  
ニ只一定ノ時間ニ於テ租稅ノ繼續徵收ヲ許ス  
ルニ今吾國ノ制度ヲ採ルニ於テハ上ニ陳ハレ

ル如キ豫防手段ヲ必要トセザルハレ又索遊豫  
美議決權ニ關スル規定ノ如クハ政府ニ廣大シ  
ル餘地ヲ與フルモノニシテ(憲法第百三條千八  
百五十二年五月五日ノ改定憲法第五條千八百  
六十年十一月廿七日ノ法律第一條及第二條)專  
收入ノ問題ニ著目シタルモノ千八百六十六年  
ノルモノニシテ憲法第百十三條千八百六十九年ノ  
ヤルビニ憲法第百十五條及千八百七十二年ノ  
西班牙憲法第百八十五條ハ一定ノ期限内ニ豫案  
ノ成立セザル場合ノ為最後ニ叶議セザル豫案

ヲ繼續せしむルノ點ニ於テ採用スルハ前例ヲ  
リ此レトモ改等憲法ニ前徵集ニ通例經常支出  
ニ關シテノニ適用スルヲ得且支出ノ増額ヲ必  
要トシ又最後ノ徵集ニ於テ豫明セザリシ國家  
ノ利益ノ為臨時ノ支出ヲ必要トスルノ場合ニ  
過セテ故：予ハ「ラ」ハ上氏ノ説及千八百五  
十年十二月十二日ノ普國內閣決議（之レを「國  
法第二卷第四百四十五丁」ニ倣ヒテノ規定ヲ提  
出セント欲ス

一期ノ為一定ノ期限内ニ徵集ノ叶議調ニ於  
ルトキハ政府ハ以前ノ徵集ニ指テシムル經常  
行政ノ支出（オルジナリウレ）ヲナスル權ヲ  
有ス故支出ノ増額並臨時ノ需用ニ充ル支出  
（エキストラオブルジナリレシ）ハ其支拂ニ關シ  
法律上義務ニ存スルカ又ハ其支出ヲ猶豫ス  
ルニ於テハ行政ノ秩序ニ關シ若クハ其他重  
要ナル國家ノ利益ニ關スル危險ヲ生スルカ  
故：勅令ヲ以テ之ヲ確定シタルニ非ザレハ  
之ヲナスコトヲ得ズ

第九 以上論定シタル豫防手段ヲ施スニ於テ



ハ議院、支出承諾権ニ伴隨スル危険、一分ヲ  
避クルルを得、レトモ上院、於テ既ニ明カナル  
カ如ク國權、著大ナル制限及爭議ノ淵源、猶  
依然トシテ存在ニ故、予ハ後来、為日本ニ於  
テ如此權利ヲ與フ、カラスト信ス然ルトキハ  
政府、法律上現行ノ收入内、於テ全ク自由ニ  
支出ヲナスリ得又君主、組織權及豫算科目  
經界、關スル問題並豫算不成立ノ場合ノ為必  
要ナル豫防手段、ハ必要ヲ生ヒ政府、唯現行  
ノ收入ヲ増額スルヲ要スルトキニ於テ、三國

會、承諾、授受セラル、キナリ予カ第四ニ提  
出シタル考案ハ國會、支出承諾権ヲ與フル場  
合ノ為、設ケタルモノナリト知、レシ地主義  
ニ反對スル者アラハ之、對テ言ハント欲ス  
曰ク英國及独ニ國、立憲制ニ變遷スル、際國  
會ノ制限アル權利ヲ以テ満足シ收入承諾権ハ  
後来、進歩ナル豫算議決権、起源ナリト  
也、レトモ日本、整備シタル豫算ノ制度ヲ備ヘ  
現今既ニ毎年豫算ヲ調製スルカ故、又其全体  
：於テ之ヲ國會ノ議ニ付シ國會ヲシテ收入支

出ノ一切ノ管理ニ関スル意見及希望ヲ皇帝ニ  
奏上スルノ權ヲ有セシメ皇帝ハ國會ノ建議ヲ  
精密ニ審査スルノ明文ヲ憲法ニ掲ケルヲ得ヤ  
シ但シ予ノ考案ニ依リテ議決ノ權ハ政府ニ於  
テ現行ノ租税ヲ増額シ或ハ新税ヲ興サシト  
テ求ルルトキハ非サレハ之ヲ國會ニ予フバカ  
ラサルナリ  
豫算ハ兩院ノ議ヲ經タル後勅令ヲ以テ確定シ  
法律ノ爲定メタル方式ニ依テ之ヲ發布ス  
是ハ一政府ノ財政ニ必要ナル標準ヲ与ヘ一

過日提出シタル意見ニ從ヒ國會ニ廣大ナル考  
案權ヲ與フルニ於テ其財政監督ニ必要ナル標  
準ヲ與フル爲ナリ若シ豫算ノ外ニ支出セント  
スルトキハ必ズヤ勅令ヲ以テ之ヲ許スナリナ  
リ  
既ニ過日論定シタル普通ノ原則ニ從ヒテ豫算  
ヲ確定シ其踰越ヲ許可スル勅令ハ法律ノ束縛  
ヲ受ケルナカ故ニ憲法上國會ノ承諾ヲ要スル  
モノニ對シ專斷ヲ以テ決定スルヲ得サルハ固  
ヨリナリ又其收入承諾權ノ成文ヲ設ケルハ固

難ナルニ非ス且其ヨリ生スル所ノ制度ハ簡明  
ニシテ行ヒ易キモノナリ而シテ其制度ノ日本  
現今ノ状況ニ適スハコトハ予ノ信ニテ疑ハサ  
ル所ナリ

千八百八十七年六月廿日  
アモツセ拜

